

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

1 貧困をなくそう



2 飢餓をゼロに



3 すべての人に健康と福祉を



4 質の高い教育をみんなに



5 ジェンダー平等を実現しよう



2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です

6 安全な水とトイレを世界中に



7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに



8 働きがいも経済成長も



9 産業と技術革新の基盤をつくろう



10 人や国の不平等をなくそう



11 住み続けられるまちづくりを



12 つくる責任 つかう責任



13 気候変動に具体的な対策を



14 海の豊かさを守ろう



15 陸の豊かさも守ろう



16 平和と公正をすべての人に



17 パートナーシップで目標を達成しよう



全国大学生生活協同組合連合会

SDGs

ハンドブック

10 人や国の不平等をなくそう



11 住み続けられるまちづくりを



12 つくる責任 つかう責任



13 気候変動に具体的な対策を



14 海の豊かさを守ろう



15 陸の豊かさも守ろう



16 平和と公正をすべての人に



13 気候変動に具体的な対策を



14 海の豊かさを守ろう



15 陸の豊かさも守ろう



16 平和と公正をすべての人に



17 パートナーシップで目標を達成しよう



つながる元気、ときめきキャンパス。



目次

- 巻頭言 | 全国大学生協連会長理事 生源寺 眞一 03
- なぜ大学生協がSDGsに取り組むのか（理事会では最低限ここを見よう！） 04
- 全国大学生協連第62回・大学生協共済連第9回通常総会アピール
「私たちの取り組みをSDGsの視点で再評価し、持続可能な社会をいっそう目指しましょう！」
..... 06
- 全国大学生協連第63回・大学生協共済連第10回通常総会 行動宣言
「すべての大学生協でSDGsに関する取り組みを進めていきましょう！」
..... 07
- 座談会 | 「大学生協×SDGs 実践を通じて学んだこと」 08
- 特集① | ちょっと気になるSDGs 10
 - ・ SDGsのあゆみ
 - ・ SDGsに至るまでの経緯について
 - ・ SDGsを考える上での「5つのP」
 - ・ ウエディングケーキモデルって何??
- 特集② | 協同組合とSDGs 12
 - ・ 協同組合とSDGsの関係について
 - ・ 地域生協での実践例を知ろう！
- 特集③ | 学生生活実態調査から見るSDGsの広がり 13
 - ・ 第54回・第55回のデータ比較
 - ・ 関心の多いテーマ・少ないテーマ
- 17のGoalsの解説と会員生協での実践例 16
- 実践 | やってみよう！レッツ！マッピング 32
- 寄稿 | SDGsがコロナ時代を乗り越える「羅針盤」に（国連広報センター所長 根本かおる）
..... 34

発行目的

SDGsは、経済・社会・環境の3つの側面で持続可能な開発を進めることを目指しており、開発の中で誰一人取り残さないこと“*No one will be left behind*”を理念としています。

生協は、営利を目的とせず人と人との結びつきでよりよい生活を実現していく組織で、消費者組織であると同時に事業者であり、利用者である組合員が意思決定や運営に参加できるという組織特性を持っています。

大学生協は組合員の参加を活発にし、協同体験を広げ、人と地球にやさしい持続可能な社会をつくることを基本的な使命としており、その理念はSDGsの基本理念と基本的に重なり合うものです。学生を主たる構成員とする大学生協は、未来社会の担い手により構成された協同組合といえます。持続可能な社会を実現するために、組合員どうしがともに学び合い、考え合い、話し合い、行動することが大切です。

全国大学生協連では、第62回通常総会でのアピール「すべての大学生協でSDGsに関連する取り組みを進めていきましょう！」を踏まえ、社会的な責任と役割の自覚を全国に広げ、取り組みを推進しています。

ハンドブック発刊に寄せて

全国大学生生活協同組合連合会

会長理事 生源寺 眞一

(福島大学食農学類長)



大学のキャンパスには着実に浸透してきました。これがSDGsをめぐる私自身の最近の実感です。3年前にはどうだったでしょうか。大学として推進本部をスタートするなど、先駆的な取り組みに着手したケースもありましたが、まだまだ少数に限られていました。したがって、学生の皆さんへの情報提供も一部にとどまっている状態でした。そんな状況のもとで、大学生協連も学内・学外に発信する活動を本格化したわけです。とくに2018年12月に名古屋で開催された第62回の総会では、特別アピールが採択されました。特別アピールには、地球社会のあり方を模索するうえでSDGsが果たす大切な役割を確認し、広く共有するねらいがありました。

今日では、大学の講義でSDGsが取り上げられることも珍しくありません。キャンパスの掲示版などで、17のゴールの図柄の入ったポスターを目にすることもあります。なかには「誰一人取り残さない」というフレーズを印象深く記憶している方もおられると思います。これはSDGsの公式文書「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の前文の一節で、we pledge that no one will be left behindが原文です。さらに大学生協の学生組合員の場合であれば、自分自身が専門的に学んでいる分野と17のゴールや169のターゲットが深く結びついているケースもあるに違いありません。むしろ、日々の暮らしと関係の深いSDGs、したがって、小さいながらも自分の貢献を意識できるゴールやターゲットもあるはずです。

ここから先のSDGsの具体的な情報については、このハンドブックの本論に委ねることにしたいと思います。残された紙幅では、SDGsの特色について、やや俯瞰的な観点から私なりの印象を書き留めておきましょう。

SDGsはふたつの大きな流れを引き継ぐかたちで構成されています。ひとつは2000年に策定された「国連ミレニアム開発目標」、すなわちMDGsの流れです。8つの目標を掲げたMDGsは基本的に開発途上国を対象としており、貧困と飢餓の克服を目指すものでした。この流れには前史があります。とくに1996年に開催された世界食料サミットにおいて地球上の栄養不足人口を減らすことが強調されており、これを具体的に反映して作成された目標がMDGsでした。世界の食料問題はSDGsのひとつの原点だと言ってもよいのです。SDGsの冒頭には「貧困をなくそう」と「飢餓をゼロに」とありますね。

ひとこと付け加えておきますと、食料は途上国の貧困層だけの問題ではありません。SDGsの目標12は「つくる責任、つかう責任」と表現されていますが、そのターゲットのひとつには「2030年までに小売・消費レベルにおける世界全体の1人当たりの食料の廃棄を半減」と明記されています。先進国の私たちも無駄のない毎日の食事によって、みずからの貢献を自覚できるわけです。なお、日本では昨年「食品ロス削減法」が超党派の議員立法として成立しましたが、この法律もSDGsを強く意識しています。興味のある皆さんは、法律の前文を読んでもよいでしょう。

さて、SDGsが引き継いだもうひとつの流れは、経済発展と環境破壊をめぐる形成されてきた国際社会の強い姿勢です。大きな転換点となったのは、1992年に開催された国連環境開発会議です。「環境と開発に関するリオ宣言」として基本原則が高く掲げられるとともに、具体的な行動計画である「アジェンダ21」が公表されたのです。ご存知の方も多いと思います。こちらの流れについても、国際的に多くのできごとがありました。ここではひとつだけ触れておくことにします。それは、1987年に国連の「環境と開発に関する世界委員会」が報告書Our Common Futureを公表したことです(邦訳は『地球の未来を守るために』)。

委員長のノルウェイ女性首相の名前からブルントラント委員会と呼ばれていますが、内容の面では「持続可能な開発」のコンセプトを国際社会に急速に広めたところに大きな貢献がありました。すなわち、「将来の世代がそのニーズを満たす可能性を損なうことなく、現在の世代のニーズを満たすような開発」こそがSustainable Developmentだというわけです。なお、英語のdevelopには自動詞の「発展する」と他動詞の「開発する」の意味がありますから、Sustainable Developmentは「持続可能な発展」と訳すこともできます。SDGsも「持続可能な開発目標」ですね。むしろ、発展と開発の双方を含んだ概念だと理解すべきでしょう。

私たち人間には、家族や友人など、身の回りの人々のことが気になる面があります。自分だけでなく、周りの人々の明日の状況が心配になることも少なくないでしょう。これに対して、SDGsには人類社会へのスケールの大きな気配りの精神が込められています。大きな流れのひとつは、サハラ砂漠以南のアフリカや南アジアに典型的な食料問題に光を当てていました。そして、もうひとつの流れは、将来世代の可能性の確保が不可欠だと明言しています。30年、あるいはその先も視野に含まれているのです。

一方には、自分たち自身の毎日の身近なつながりがあり、他方でSDGsはPlanetとPartnershipという表現を用いながら、次の世代を仲間を含めた地球社会の連携の大切さを訴えかけています。そのスケールは違います。けれども、身近なつながりと地球社会の連携の橋渡しを担うことのできる組織が存在しているのです。それが世界各地で活動する多彩な協同組合にほかなりません。言うまでもなく、私たちの大学生協もその一角を占めています。

組合員の交流はときには大学の枠を越えることになり、国際交流の取り組みも定着しています。大学生協は組合員の相互扶助の組織であると同時に、外に開かれた能動的な活動組織でもあるのです。縦のつながりという点でも、先輩から後輩への継承・発展に加えて、教職員組合員と学生組合員のあいだには異なる世代間の交流という要素が濃厚です。こんな大学生協の特色を踏まえながら、SDGsが具体的に提示している空間的・時間的視野の意味合いをしっかりと受け止めたいと思います。そして、毎日の暮らしをベースにした協同活動の発展形を模索すること。これがSDGsを受け止めた大学生協の橋渡しの役割にも結びつくのではないのでしょうか。

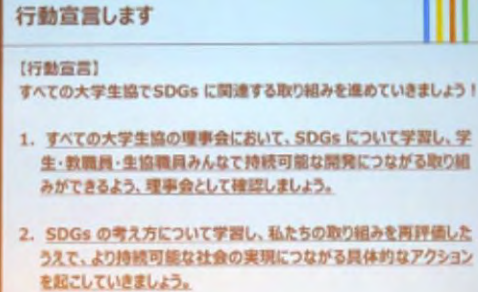
(2020年8月)



大学生協×SDGs



国際連合が、2016年～2030年までの15年間で達成しようとしているSDGsは、日本でも認知が広がり、様々な組織・団体で取り組みが行われています。大学生協も、SDGs達成の上で重要なステークホルダーとされています。まずは大学生協とSDGsの関係を学びましょう！



●SDGs(持続可能な開発目標)とは

持続可能な開発目標

(Sustainable Development Goals)とは

持続可能な開発とは、「将来の世代がそのニーズを充足する能力を損なわずに、現世代のニーズを充足する開発」と定義されています。すなわち、私たちの子どもや孫の世代になっても、世界のすべての人々が人間らしい暮らしを続けていける開発のあり方です。持続可能な開発を実現するためには、**経済成長**、**社会的包摂**、**環境保護**という3つの主要素を調和させることが不可欠です。

持続可能な開発を世界全体で実現するために、2015年9月の国連総会で「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されました。この文書の中で「持続可能な開発目標(SDGs)が掲げられています。

このSDGsは、「**誰ひとり取り残さない(No one will be left behind.)**」ことを目指し、先進国と開発途上国が一丸となって達成すべき目標です。世界の諸課題を統合的に解決し、持続可能な開発を実現することが重要です。



経済成長

例：あらゆる貧困の解決

社会的包摂

例：人権 平和・公平

環境保護

例：気候変動 海洋・森林

●なぜ生協がSDGsに取り組むのか

協同組合はSDGs達成への重要なステークホルダー



「一人は万人のために、万人は一人のために」という協同組合の精神は、SDGsが掲げる「誰一人取り残さない」という行動理念と合致しています。SDGsのベースを策定する上で、NGO(非政府組織)の一つとしてICA(国際協同組合同盟)も参加しており、**協同組合は持続可能な開発目標を達成する上で重要なステークホルダー**とされています。

2016年に「協同組合の思想と実践」がユネスコの無形文化遺産に登録されました。これは、**人々が協同・参加して社会的課題を解決する協同組合という仕組み**が国際的に評価されたということです。日本政府でも協同組合への期待は高まっており、「新しい公共」の一つとして、SDGs達成の上で重要なステークホルダーと位置付けられています。

協同組合をはじめ、地域の住民が共助の精神で参加する公共的な活動を担う民間主体が、各地域に山積する課題の解決に向けて、自立と共生を基本とする人間らしい社会を築き、地域の絆を再生し、SDGsへ貢献していくことが期待されている。

日本政府SDGs推進本部「SDGs実施指針改定版」(2019.12.20)

持続可能な開発目標では、世界全体でより目標達成を実現するために、以下の5つの特徴を持っています。

普遍性

開発途上国だけではなく、先進国も含めた全世界共通の目標としてすべての国が行動する。

包摂性

人間の安全保障の理念を反映し、最も脆弱な立場の人々に焦点を当てる。

参画性

政府、企業、NGO(非政府組織)、有識者などすべてのステークホルダーが役割を持つ。

統合性

経済・社会・環境のいずれの側面も追求し、すべての目標に対して総合的に取り組む。

透明性

モニタリング指標を定め、定期的に目標の達成状況について進捗確認をする。

SDGsの達成のためには、一人ひとりの行動が大切です！

SDGsの達成におけるステークホルダーは、政府や企業だけではなく、地球市民一人ひとりです。市民社会が行動することによって、目標達成の可能性が高まります。目標を持って行動してみましょう。

重点課題を明確にする

取り組みの目標設定

取り組むことを周りに宣言

取り組みの実践

協同組合・生活協同組合の理念とSDGsの考え方の親和性

協同組合の特徴は、「**経済的な結びつきだけではなく、人的にも結びついた組織**」であることです。協同組合の組合員は、自ら出資し、運営し、そして参加・参画し、一人一票という原則でみんなが平等に意思表明できるシステムで経営されています。

そして協同組合は、その地域で暮らす・働く・学ぶ人が組合員であり、地域や職域といったコミュニティと一体です。したがって、コミュニティを通じてSDGsを達成することができます。

第7原則 コミュニティへの関与
協同組合は、組合員によって承認された政策を通じてコミュニティの持続可能な発展のために活動する。(協同組合原則より)

「協同組合は、平等と民主的参加の原則を保っている。協同組合は、誰も取り残さないというSDGsの原則を体現している」

「SDGsそのものと同じように、協同組合は人を中心に置く。組合員の所有と運営のもと、協同組合はコミュニティに強く関与している」

—潘基文 国連事務総長(2016年当時)

すべての人を対象として社会的課題の解決を図るSDGsの考え方は、すべての組合員の「多様な参加」によってつくられる大学生協にとって、あらゆる活動に根付いている考え方です。

●大学生協がSDGs達成にできること

SDGsは大学コミュニティにおける 共通言語になっています！

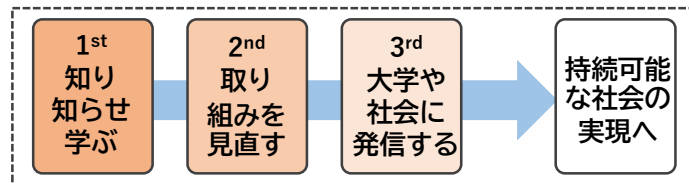
SDGsの達成のためには、大学を中心とした高等教育機関の役割発揮が重要とされています。大学は、社会における知識の共通基盤であり、研究と教育を通じて新たな社会・経済システムを提案する役割を發揮します。これらの研究・教育における世界レベルでの共通言語がSDGsになっています。

大学の社会貢献の取り組みを、国連のSDGsの枠組みを使って可視化するランキング(『THE大学インパクトランキング2020』)も登場しています。総合ランキングの対象となった766大学のうち、63大学が日本の大学となっています。

大学での教育・研究活動はもちろん、**キャンパスライフでの実践を通じてSDGs達成に貢献することで、国際社会共通の課題を解決していく大学づくりにつながります。**



理事会や組織委員会が学び、 話し合い・行動しよう！



大学生協として、まずは理事会や組織委員会が中心となってSDGsについて学びましょう。そして、自大学生協の取り組みをSDGsの視点で見直し(意味付け)しましょう。その上で、大学や地域社会に発信をすることで、**SDGsを共通言語**にして、一緒に取り組みを進めていく仲間を増やしましょう。

●SDGsの17の目標について

17の各目標に対し、それらを達成するために必要な具体目標(ターゲット)が、それぞれ5から10程度、計169設定されています。具体的にどのようなことを目指すか・大学生協が目標達成のためにできることについては、14ページからの各論をご覧ください。

<p>1 貧困をなくそう</p>	<p>目標1(貧困をなくそう) あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる。</p>	<p>3 すべての人に健康と福祉を</p>	<p>目標3(保健) あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する。</p>
<p>2 飢餓をゼロに</p>	<p>目標2(飢餓をゼロに) 飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する。</p>	<p>5 ジェンダー平等を実現しよう</p>	<p>目標5(ジェンダー) ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う。</p>
<p>4 質の高い教育をみんなに</p>	<p>目標4(教育) すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する。</p>	<p>7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに</p>	<p>目標7(エネルギー) すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する。</p>
<p>6 安全な水とトイレを世界中に</p>	<p>目標5(水・衛生) すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する。</p>	<p>9 産業と技術革新の基盤をつくろう</p>	<p>目標9(インフラ、産業化、イノベーション) 強靱(レジリエント)なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る。</p>
<p>8 働きがいも経済成長も</p>	<p>目標8(経済成長と雇用) 包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用(ディーセント・ワーク)を促進する。</p>	<p>11 住み続けられるまちづくりを</p>	<p>目標11(持続可能な都市) 包摂的で安全かつ強靱(レジリエント)で持続可能な都市及び人間居住を実現する。</p>
<p>10 人や国の不平等をなくそう</p>	<p>目標10(不平等をなくそう) 各国内及び各国間の不平等を是正する。</p>	<p>13 気候変動に具体的な対策を</p>	<p>目標13(気候変動) 気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる。</p>
<p>12 つくる責任 つかう責任</p>	<p>目標12(つくる責任、つかう責任) 持続可能な生産消費形態を確保する。</p>	<p>15 海の豊かさを守ろう</p>	<p>目標15(陸上資源) 陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する。</p>
<p>14 海の豊かさを守ろう</p>	<p>目標14(海洋資源) 持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する。</p>	<p>17 パートナーシップで目標を達成しよう</p>	<p>目標17(実施手段) 持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化化する。</p>
<p>16 平和と公正をすべての人に</p>	<p>目標16(平和) 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する。</p>		

2018 年 12 月 16 日

全国大学生生活協同組合連合会

全国大学生協共済生活協同組合連合会

私たちの取り組みを SDGs の視点で再評価し、 持続可能な社会をいっそう目指しましょう！

私たちは、2006 年の総会にて決定した「21 世紀を生きる大学生協の使命とビジョンとアクションプラン」のもと、様々な取り組みを進めてきました。使命の 4 つ目を、「魅力ある事業として組合員の参加を活発にし、人と地球にやさしい持続可能な社会を実現する」としています。

SDGs(持続可能な開発目標)は、2015 年 9 月の国連サミットにて全会一致で採択されました。先進国を含む国際社会全体の目標として、2030 年を期限とする包括的な 17 の目標を設定し、「誰一人取り残さない」社会の実現をめざし、経済・社会・環境をめぐる広範な課題に、統合的に取り組むこと、全ての関係者（先進国、途上国、民間企業、NPO、有識者等）の役割を重視することをその内容としています。

SDGs のめざす「誰一人取り残さない」ことは、協同組合が価値として平等や民主主義を大切にしていることと共通しており、私たちにとって共感できる目標です。また、大学生協が取り組んでいることは、SDGs と関連付けて捉えることで再評価することができます。まずは SDGs が何を目指しているのか学ぶことから始めましょう。「マッピング」という「自分たちが取り組んでいることを出して SDGs の 17 個の目標(ターゲット、指標)との関連を考えるワーク」を通して、大学生協の取り組みが社会にどう影響しているのか考えてみましょう。

持続可能な社会は、大学生協だけでは実現できません。SDGs をきっかけに、大学や地域、取引先など大学生協に関わる人たちとともに取り組みましょう。広報物にロゴを入れたり、SDGs に関して大学に報告したりするなど、SDGs を共通の言語として様々な人と関わりを持ち、持続可能な社会に向けて一緒に取り組む方法を考えることが必要です。

以上より、大学生協として持続可能な社会を実現するために、

- ・協同組合と SDGs についての学習会を実施・参加し、学びながら取り組みを進めましょう。
- ・私たちがこれまで取り組んできたことを、SDGs を共通の言語として大学や地域とともに進めましょう。

以上

¹ SDGs では「誰一人取り残さない」ために、「あらゆる形態及び側面において貧困と飢餓に終止符を打ち、すべての人間が尊厳と平等の下に、そして健康な環境の下に、その持てる潜在能力を発揮することができることを確保すること」を明記しています。

「すべての大学生協で SDGs に関連する取り組みを進めていきましょう！」

全国大学生協連組合連合会
全国大学生協共済生活協同組合連合会

SDGs(持続可能な開発目標)とは、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された2030年までの国際社会全体の目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さないこと(leave no one behind)を誓っています。経済・社会・環境をめぐる広範な課題に、統合的に取り組むこと、すべての国とすべてのステークホルダー(政府・企業・NGO・有権者等)の役割を重視することを特徴としています。

私たち大学生協は、「人と地球にやさしい持続可能な社会を実現する」ことをビジョンの一つとして掲げ、すべての組合員とともに様々な取り組みを進めてきました。SDGsのめざす「誰一人取り残さない」という考え方は、協同組合が平等や民主主義を大切にしていることと共通しており、私たちにとって共感できる目標です。すべての人を対象とする包摂性を特徴とするSDGsの考え方は、すべての組合員の「多様な参加」によってつくれる大学生協にとって、あらゆる活動に元来根付いている考え方の1つです。

1. すべての大学生協の理事会において、SDGs について学習し、学生・教職員・生協職員みんなで持続可能な開発につながる取り組みができるよう、理事会として確認しましょう。

- ✓ すべての大学生協の理事会において、SDGs や持続可能な社会に関する学習の機会を設け、自らの大学生協の取り組みがSDGsの17の目標と関連していることを確認しましょう。
- ✓ すべての大学生協の総会・総代会議案において、大学生協の取り組み全般をSDGsの視点での振り返り、組合員や総代とともに確認しましょう。

2. SDGs の考え方について学習し、私たちの取り組みを再評価したうえで、より持続可能な社会の実現につながる具体的なアクションを起こしていきましょう。

- ✓ 理事会や組織委員会が中心となり、より多くの組合員とともに、持続可能な社会について考える機会を作りましょう。
- ✓ ビジョンとアクションプランなど、各大学生協の中長期的な方針・方向性を検討する中で、SDGsの視点を盛り込み、2030年を見据えた実践を積み重ねていきましょう。
- ✓ 大学とともに、持続可能な社会の実現につながる取り組みをすすめましょう。

以上を踏まえて、大学生協として持続可能な社会を実現するために、

すべての大学生協で SDGs に関連する取り組みを進めていきましょう。

座談会

大学生協×SDGs 実践を通じて学んだこと



北海道大学生協同組合・水産大学校生活協同組合

大学生協の取り組みを通じて、持続可能な社会を作る取り組みを実践した2大学生協の学生理事・教職員理事・生協職員にお集まりいただき、SDGsを意識した取り組みを実現するためのヒントを探りました。

座談会参加者

【北海道大学生協】 小助川 誠さん(北海道大学生協専務理事)・伊藤 凌さん(同大学院生)・中山 拓登さん(同大学院生)
【水産大学校生協】 荒木 晶さん(水産大学校准教授)・斉藤 光さん(同大学校学生)
【インタビュアー】 児島 佳幸(全国大学生協連 社会的課題委員)・矢間 裕大(全国大学生協連 学生委員長)

●取り組みについて教えてください

北海道大学生協：レジ袋有料化の取り組み

伊藤：2019年になり社会的にもレジ袋削減の動きが出てきたことから、環境課題推進委員会内で議論して取り組みを始めました。まずは、北大生協店舗の利用者が実際にどれくらいレジ袋を使っているかのアンケートを行いました。レジ袋の利用状況や有料化への意見を聞き、その結果を踏まえて有料化の動きを作りました。議論の母体となった推進委員会には、大学の組織である「サステイナブルキャンパスマネジメント本部」に所属されている教員にもオブザーバー参加をいただいています。広報時のSDGsマッピングなどは、大学の先生にも協力を仰ぎながら準備を進めました。

中山：SDGsとの関係ではレジ袋の有料化を通して、北海道大学が目指している「サステイナブルな(持続可能な)人材を育成する」とか「サステイナブルな社会に貢献する大学の実現」に大学生協も力を貸せるんだというアピールになるというのが大きかったと思います。

矢間：理事会での議論を作る中で、どういう人とどういう議論を組み立てましたか？

小助川：この問題をまず理事会で議論し、環境課題推進委員会に有料化の是非について環境課題推進委員会に委嘱して、理事会に答申案を提出してもらいこれをもとに議論しました。環境課題推進委員会委員が複数理事としており、理事会の中では有料化の良し悪しではなく、理事の中には有料化した場合、学内に立地しているコンビニ業者とのサービスでの格差が生じるのではないかと懸念する意見がありましたが、必要だから有料化を進めようという感じで理解を深めていったという印象です。有料化で得た収益をどうするか具体的に決めていなかったこともあり、何に収益を充てるか議論になりましたが、今年は有料化で得た預り金の大半を大学が新入生にエコバックをプレゼントするという取り組みに寄附しました。

矢間：SDGsは「共通言語」だと言われますが、大学の中でどんな反応や変化がありましたか？

中山：有料化になるとやはりレジ袋は生活の中では便利なものでかなり頼って生活していたということに気づかされます。理事会の議論で面白かったのは、有料化に伴って不便・困ったでは終わらないようにしたいという議論が出てきたことです。例えば研究室のまとめ買いにはデポジット制でカゴを用意するか、有料化前と同じ機能を果たし続けるためのアイデアがいろいろ出てきたことです。ただの環境団体ではなく、生協としての機能や生活の水準を維持し続けるためにどういう風に事業を構築していくか、という議論が積極的になされたのは、後になってはよかったな、と思います。

児島：日常生活の中から環境に目を向けていける、という視点が重要だと改めて感じました。

小助川：推進委員会の中に正規職員が関わっていることで細かい事も大学と打ち合わせながらできたのも強みだと思います。レジ袋の辞退率は上がっていますが、これがどういうことに繋がっていているのかはもっと示していけるとよいと思いますね。



水産大学校生協：生協店舗でSDGs関連書籍コーナーを作成

斉藤：店舗の書籍コーナーにSDGsの17の目標がわかるように掲示物を作成しました。そしてSDGsに関する書籍をまとめた棚を作りました。学生委員会から組合員に対してSDGsの認知を広げたいというのが目的です。自分たちも、SDGsを詳しく知っていたわけではなかったのが、広げようというよりは取り組みをしていく中で自分たちも学んでいけると思ったのが大きいです。SDGsという言葉は知っているけどその中身はあんまり知らないという組合員に対して、1つのきっかけになればいいなと思っています。



矢間：実際にお店を利用する組合員と一緒に取り組んだ学生委員・理事会メンバーなど周囲の反応はどうでしたか？

斉藤：店舗の職員さんによると足を止める学生はある程度いるらしいです。私も学生が「SDGsって知っている？」みたいな会話を店舗で見聞きしたこともあります。少しずつではあるけれど成果は出てきていると思います。学生委員会の活動の中では今はずいぶんある取り組みがSDGsの目標とのつながりを後付けで考えている状態です。すぐには無理でも、数年後にはSDGsのゴールを意識しながら取り組みを考えられると、より多くの組合員に身近に感じていってもらえると思っています。

荒木：人を育てていくという観点では大学ももっとSDGsに関する取り組みをしていかなければいけないとは思っています。一方で、それなら大学生協から学生が主体となって発信していけばいいのではないのか、とも思います。学生からガンガン発信していくことで横に共感を広げていくことが大事です。誰かの命令や指示ではなく学生同士で広げていく、というのは大学生協の考え方にも近いですね。

●2030年に向けて大学生協は何ができる？

児嶋：今後2030年に向けてもいろいろと大学生協は取り組みを行っていきと思います。普段やっている取り組みの中でSDGsを意識することの重要性について考えを教えてください。

伊藤：大学生協は大学構成員にとって生活の一部だと思います。ご飯を食べたり、本を買ったり。だからこそそういう活動をしやすいフィールドだと思う。SDGsについて広報（アピール）できるのだとしたら、いろいろ取り組んでいく中でコミュニティに貢献していけるとも思います。

中山：「なぜ我々はSDGsを考えていけるのか」という風に考えた時に、キャンパスの中にはいろいろな人がいます。学んでいること1つとっても違うし、バックグラウンドが違う人が集まっています。生活においては、人によって格差もある。協同組合はそれを少しでもなくしていきたいということを大事にしてきたと思う。私たちは生活と密接に関わって事業をしてきているので、組織活動の面では精神的にも寄り添えあえる、いろいろな考え方をを持った人と一緒に頑張れる土壌があると思います。だからこそSDGsとも親和性は高いと感じます。

小助川：荒木先生がおっしゃっていましたが、学生中心が大事だと思います。組織活動は大学生協の強みなので。例えば、協同組合という部分では、地域生協も頑張っておられますので、そういうところに学生もかかわっていけるといいのではないかと考えています。事業のところでは、レジ袋の次はフードロスについて行動できればと考えています。

児嶋：大学生協の中で頑張れることというのは、「確かに！」と思う部分が多いです。学生委員会・教職委員会は今後いろいろと取り組みを行っていきと思いますが、どういうことを大事にしたいですか？

齊藤：SDGsの最終目的として「誰一人取り残さない」という言葉があります。それをきちんと意識し、共通認識として持ち続けることが大事だと思います。目的を見失わないということですね。普段の生活で行っていることの延長線上に学生委員会の活動があればいいと思っていて、水産大学だからというよりは私たちの生活の中で何ができるか、を考えて活動したいと思っています。例えば、水産大学だからゴール14の「海の豊かさを守ろう」に目が行きがちですが、そこにこだわるのではなく、普段の生活の中で自分たちに何ができるのかを観点にして、目的を見失わないでSDGsが広がっていくといいな、と思います。



荒木：大学に居るのは、社会に出る前の学生がほとんど。その学生たちにSDGsという概念、「誰一人取り残さない」という考え方をしっかり伝えていくことが大事だと思います。大学生協がというよりは教員としてという部分が大きいかもしれませんが、きちんとこの考え方を身に付けて社会で実践していける学生を輩出していければと思っています。2030年にすべてを達成することは難しいけど、SDGsという共通言語を一人一人が身に付けるということを活動の中でしていければいいと思いますね。

●全国の仲間に向けてメッセージ



伊藤 凌さん（北海道大学生協理事・環境課題推進委員長／院生）

取り組みに参加する中で、日々の生活で「やっぱ要らない」「これ大学でできるのに」と思うことはあると思います。私たちにとってはそれがたまたま「レジ袋」だけでした。いろいろな人と協力しながらできることからやっていけばいいのではないかと考えています。力を込めてジャンプしなくても、ぼっと一歩踏み出せることはいろいろあるんじゃないかな、と。



中山 拓登さん（北海道大学生協常務理事・環境活動推進委員／院生）

SDGs全体を考えるとときに“S(Sustainable)”が結局なんなのかというのがいろいろなことを考えるカギになってくるのではないかと考えています。何かをしたときのメリット・デメリットの両方に目を向けて、できるだけ多くの人がいい思いができるようなことを考えていくのがSDGs達成のための行動を考えることとして大切にされることだと考えています。実際にやってみると身近なところに世界の問題とつながっていることがあるので、それをキャンパスに居る仲間と考えていってもらえればと思います。



小助川 誠さん（北海道大学生協専務理事）

学生中心にいろいろと行動提起をしてほしいと思います。一方で事業の中で判断できるかな？という部分はあると思います。生協職員が関わるか否かでその幅の広さが変わります。ぜひ、生協職員も積極的に関わって、いろいろな人との協力で取り組んでいければと思います。一緒に頑張りましょう！



荒木 晶さん（水産大学校生協理事／水産大学校准教授）

SDGsの達成に向けて様々な実践をしていきたいと思います。何か1つのゴールが達成すればよいのではなく、それぞれのゴールは絡み合っていて、それをバランスよく達成していくことで持続可能な社会につながります。SDGsの達成に向けてみんなが努力していくことで住みやすい地球にしていく、みんなが笑顔でいられるような社会をつくっていったらいいんじゃないかな、と思っています。ずっと先の未来は想像しがたいけれど、子どもや孫の世代が笑顔で暮らせるような世の中にしていくために、SDGsを使って社会をよくできればと思っています。



齊藤 光さん（水産大学校生協理事・副学生委員長／学部生）

私もSDGsについてすべてを説明できるわけではありませんが、17の目標をもとに身近なところを意識するだけでも変わってくると思います。自分たちの活動との関連性を考えるところからでも続けていくことが大事だと今日の座談会に参加して改めて感じました。私たちも引き続き頑張っていきたいと思っています。



今回の座談会の全文は、全国大学生協連HP特設サイト「全国大学生協連×SDGs」でご覧いただけます。
(<https://www.univcoop.or.jp/sdgs/index.html>)

ちょっと気になるSDGs

「SDGs(Sustainable Development Goals；持続可能な開発目標)」とは、2015年9月の国連サミットにおいて全会一致で採択された、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された国際目標のことです。今や世界の共通言語となっているSDGsがどのようにして策定されたのか、ちょっと気になるその背景と歩みを覗いてみましょう。



SDGsの前身となったMDGs(ミレニアム開発目標)

●SDGsの歩み

日常生活の危機的状況 ～世界と日本の持続不可能性を実感～

世界で頻発する終わりの見えないテロや紛争、国境を超える感染症、北極圏の氷の加速度的な減少や世界各地で多発する異常気象、また組織的なグローバル企業や長富裕層の税逃れ、貧富の差の拡大など、私たちの安心で安全な生活を脅かす厳しい現実には数えきれないほどです。この状況は日本でも例外ではなく、超高齢化社会の到来や頻発する災害などを含め、様々な危機的状況にさらされています。

メドウズらの未来予測では、環境汚染や利用可能な資源の激減によって、人類は2030年から2040年に大きな経済的破壊に直面するとされていました。これほどまでに、全世界で「環境」「社会」「経済」の持続不可能性が明らかになっているという現実から、だれも目を背けるわけにはいきません。

持続不可能性が近年で最も高まっている世界を変革することを目指しているのが「持続可能な開発のための2030アジェンダ」であり、その中で地球規模課題の解決を目指す大きな目標として策定されているのがSDGsなのです。

●SDGsに至るまでの経緯について

SDGsには前身がある!? ～MDGs(ミレニアム開発目標)～

SDGsは、国連開発計画の主導で2001年に策定された「MDGs(ミレニアム開発目標)」を前身として作られました。このMDGsは発展途上国向けの開発目標であり、2000年に採択された「国際ミレニアム宣言」と1990年代の主要な国際会議で定められた開発目標をまとめたものです。【貧困・飢餓】【初等教育】【女性】【乳幼児】【妊産婦】【疾病】【環境】【連帯】に関する8つの目標と、それに基づく21のターゲット・60の指標が掲げられていました。MDGsは2015年を達成期限としていた目標で、1日1.25ドル未満で生活する人々の割合が半減する、小学校で男女の就学率がほぼ同数になる、マラリアによる死亡者数が約3分の1減少するなど一定の成果を残している一方で、乳幼児や妊産婦の死亡率低減未達成、サハラ以南の南部アフリカにおける進捗の遅れ、都市部と農村部の格差拡大といった課題は改善されず残ったままとなったのです。こういった結果を踏まえ、SDGsのGoal1～6、そしてGoal17はこのMDGsを引き継いで設定されました。

「持続可能な社会」を目指して ～SDGs採択までの世界的な流れ～

第二次世界大戦後、世界は復興から成長へと歩みを進めました。その一方で人口の急増や地球環境の悪化、先進国と発展途上国の巨大な経済格差や貧困といった課題が浮き彫りになってきました。

国連が設置した「環境と開発に関する世界委員会」は、1987年に「我ら共有の未来(Our Common Future)」という報告書を発表しました。その中では持続可能な開発について、「*将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させる開発*」と述べられており、これが現在でもこの言葉の定義として広く受け入れられています。

SDGsが記載されている「2030アジェンダ」も、現代の我々のために、将来世代の可能性を奪ってはならない、という考えのもと採択されました。

1945年の国連設立から今日まで行われてきた、国際会議や条約の採択を含む環境問題や性差別、人権・社会問題といった様々な分野に関する取り組みは、「持続可能な社会」を目指すうえですべてつながっています。

参画型・透明性を大切に ～3年以上の議論の末策定されたSDGs～

前身のMDGsが国連開発計画の主導で策定されたのに対して、SDGsは徹底した参加型で、3年以上にわたる議論の末に策定されました。SDGsを提案したのは、2015年にノーベル平和賞を受賞したファン・マヌエル・サントス大統領を要するコロンビア共和国の政府です。2012年6月に行われた「国連持続可能な開発会議(リオ+20)」では、コロンビア政府が提案した「環境・経済を開発に統合する包括的開発目標」が同会議の主催国であるブラジルに受け入れられたことで、SDGsの策定が目玉となりました。

その後、国連ではこれを審議するオープンな作業部会(Open Working Group；OWG)が組織され、女性、子どもや若者、少数民族、産業界、NGO、科学者といった非国家主体を9つにまとめた「メジャー・グループ」も参加して審議がされました。草案に対し意見を言い合い、対案を出し、成案に進めるプロセスも公開されており、9つのメジャーグループとその他4グループの合計13グループが、公式プロセスで国連のSDGsに意見を反映させました。

●SDGsを考える上での「5つのP」

持続可能な開発のための5つのP ～SDGsのもうひとつの捉え方～

SDGsは、持続可能な開発のための「5つのP」を掲げています。5つのPは、「People=人間」「Planet=地球」「Prosperity=豊かさ」「Peace=平和」「Partnership=パートナーシップ」を指します。SDGsの諸目標とターゲットはいずれも、人間、地球、豊かさ、平和のための目標であり、国際社会のパートナーシップにより実現を目指します。文末のかっこの中に関連するGoalを表します。

人間 (People)

すべての人の人権が尊重され、尊厳をもち、病棟に、洗剤能力を発揮できるようにする。貧困と飢餓を終わらせ、ジェンダー平等を達成し、すべての人に教育、水と衛生、健康的な生活を保障する。(1,2,3,4,5,6)

地球 (Planet)

責任ある消費と生産、天然資源の持続可能な管理、気候変動への緊急な対応などを通して、地球を破壊から守る。(12,13,14,15)

豊かさ (Prosperity)

すべての人が豊かで充実した生活を送れるようにし、自然と調和する経済、社会、技術の進展を確保するということです。(7,8,9,10,11)



国際連合広報センターHPより

平和 (Peace)

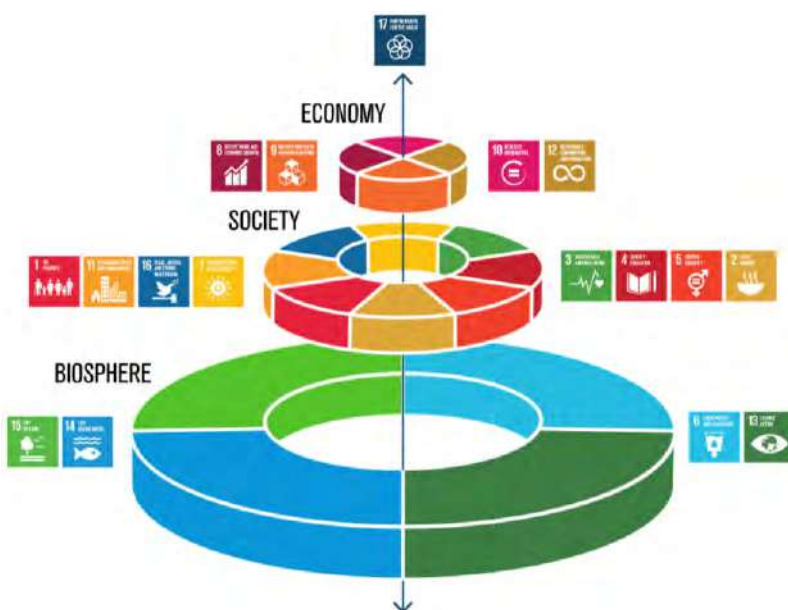
平和、公正で、恐怖と暴力のない、インクルーシブな（すべての人が受け入れられ参加できる）世界をめざす。(16)

パートナーシップ (Partnership)

政府、民間セクター、市民社会、国連機関を含む多様な関係性が参加する、グローバルなパートナーシップにより実現を目指す。(17)

●ウェディングケーキモデルって何??

SDGsの概念を表す構造モデル ～環境、社会、経済～



Azote Images for Stockholm Resilience Centre, Stockholm Universityより

SDGsがめざすのは、①地球の環境を守りながら、②すべての人が尊厳をもって生きられる社会と、③誰もが豊かな暮らしを継続的に営むことのできる経済を実現することです。①は環境、②は社会、③は経済の側面です。

それを分かりやすく図式化したのが、右下の図です。「社会」と「経済」は「環境」なくして成り立たないということです。ウェディングケーキに形状が似ていることから「SDGsウェディングケーキモデル」と呼ばれています。国際的に著名な環境学者であり、SDGsのもととなる概念「プラネタリーバウンダリー（地球の限界）」を提唱したヨハン・ロックストローム博士とパヴァン・スクデフ博士が考案しました。

6、13、14、15の目標によって環境を守り、1、2、3、4、5、7、11、16の社会を実現し、8、9、10、12の経済活動を可能とします。これらを実現するために欠かせないのが、一番上にある17のパートナーシップです。国や企業をはじめとした全世界の人々がパートナーシップを組むことなしに、持続可能な社会を作り上げることを目標にしています。

協同組合とSDGs

ここでは、協同組合とSDGsの関係と地域生協の実践例を書いています。協同組合にはまだまだ可能性が秘められています。それを地域生協の実践例を見ていくことによって、協同組合にかかわる私たちに何ができるのかを考えていきます。



●協同組合とSDGsの関係について

協同組合とSDGs

～どんな関係があるの？～

協同組合の精神には、「一人は万人のために、万人は一人のために」というものがあります。日々の不安や将来の心配がある中、様々な諸問題をみんなで解決していくというものです。また、SDGsには「誰一人取り残さない」という行動理念があります。これは、現在社会で起きている諸問題に対してみんなで解決を目指していくというものです。このように、SDGsの中には、協同組合の思想が散りばめられています。

また、協同組合は「お金の結びつきではなく、人的にも結びついた」組織です。協同組合の組合員は、自ら出資・利用・運営をしていることから自らのコミュニティの課題に対して無関心でいられません。それが協同組合の価値とも言えます。SDGsに置き換えて考えると、**自分たちが生活している地域（コミュニティ）の一員として諸問題を自分たちの手で解決していくことが求められます。**

これらの点を見ると、協同組合とSDGsには共通している点があるといえます。

協同組合が秘めている可能性

～一体何ができるのか～

2016年に「協同組合の思想と実践」がユネスコ無形文化遺産に登録されました。これは、協同し、参加して社会的課題を解決するという仕組みが国際的に評価されたということです。国内においても、協同組合への期待が高まっています。日本政府は2019年のSDGs実施指針の改定に、協同組合をはじめ、地域住民が共助の精神で参加する公共的な活動を担う民間主体が、各地域の様々な課題解決へ向けて、自立と共生を基本とする人間らしい社会を築き、地域の絆を再生し、SDGsへ貢献していくことが期待されるといわれています。

このように**協同組合は新しい公共として位置づけられています。**

協同組合が目指しているものとSDGsがめざす社会には大きく重なる部分があります。そこで、1つの協同組合が1つの目標だけを達成しようとするのではなく、より多くの協同組合同士の協同によって、より多くの目的を達成していくことが求められます。

●地域生協での実践例を知ろう！

大阪いずみ市民生活協同組合

～SDGsへの取り組み方針の策定～

大阪いずみ市民生協は、2017年に「SDGsへの取り組み方針」を策定しました。方針の中では、同生協グループの組織・事業の特性と、地域や組合員の抱える社会課題の観点から優先的に取り組む優先課題を設定し、達成に向けた目標設定と年度ごとの振り返りを行っています。

優先課題のひとつであるエシカル消費については、店舗でエシカル商品が目立つよう陳列したり、紙製ストローに切り替えていたりして、2018年度のエシカル消費対応商品の取り扱い品目数は前年度比128.7%、供給高は106.7%に増加しました。また、生協の食品と資源ごみのリサイクルの流れを学ぶ「エコ・バスター」も実施しています。

泉州北エリア委員会では、まずはコープ委員自身が日頃の生活の中でSDGsへの関心を高めました。そして、多くの組合員に気軽にSDGsを知ってもらおうと、想いがこもったオリジナルかるたを作成しました。



いばらきコープ生活協同組合

～ほぺたん食堂がつくるコミュニティ～

「ほぺたん食堂」は、いばらきコープが2016年に始めた、全国初の生協による子ども食堂です。同生協は、食育教室を実施する中で気づいた子どもの食生活の現状と、地域には一人暮らしの高齢者が多いことから、「地域のみなで食卓を囲む居場所づくり」に向けてこの取り組みを始めました。市の社会福祉協議会と共催しているほか、地元JAが食材を無償で提供し、地域住民や近隣の学生などのボランティアと組合員が運営に協力するなど、様々な人との連携によって実現しています。

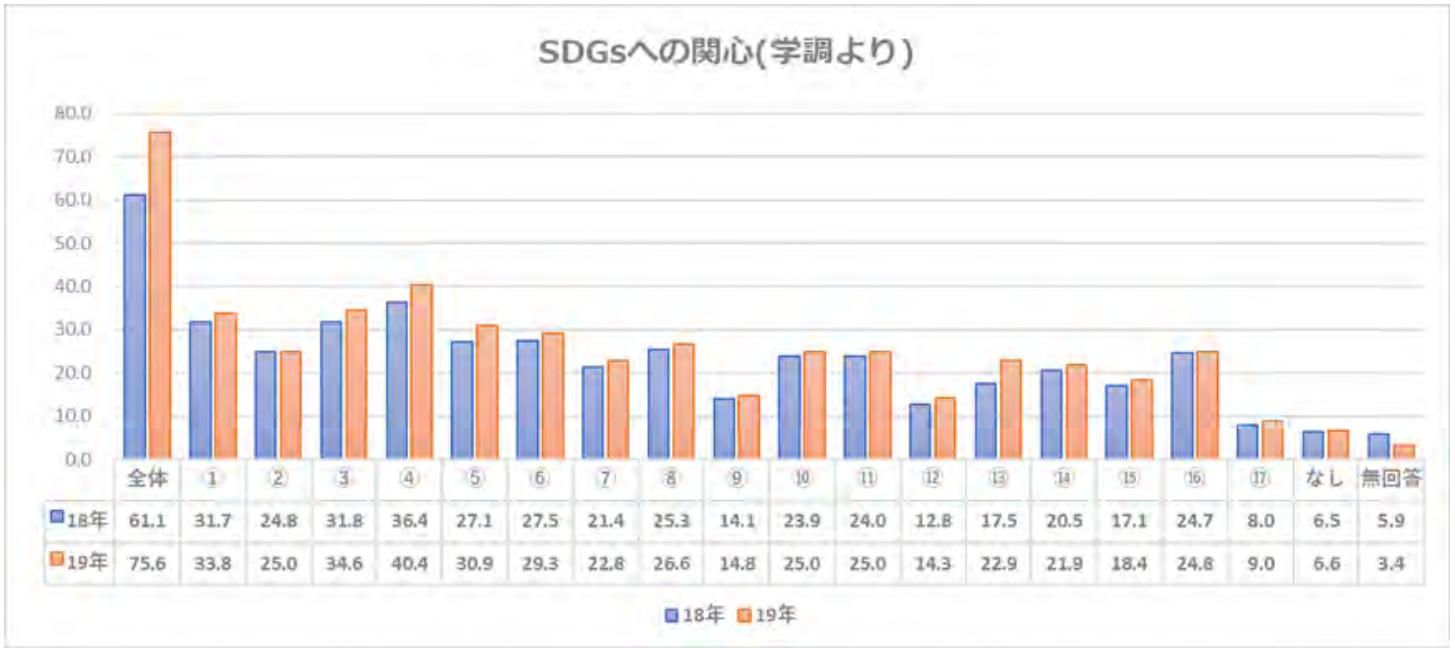
地域の子どもたちに温かい夕食を提供するとともに、勉強もできるような安心して過ごせる居場所づくりを目指して始めたこの取り組みは、多様な人々が交流する中で、「地域の共食」「地域コミュニティの再生」といった、当初は想定していなかった成果にもつながってきています。



学生生活実態調査から 見るSDGsの広がり

例年実施している「学生生活実態調査」では、第54回(2018年実施分)からSDGsへの関心についての項目を設けています。今回は、第54回・第55回のデータを基に、SDGsの広がりを分析してみました。

●第54回・第55回のデータ比較



出典: <https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>

●関心の多いテーマ・少ないテーマ

関心の多いGoals ～質の高い教育をみんなに～



関心が多いテーマとして、④質の高い教育をみんなに(40.4%)、③すべての人に健康と福祉を(34.6%)、①貧困をなくそう(33.8%)が挙げられます。

学ぶことを本分とする大学生にとっては、教育への関心が高いことは必然と言えるでしょう。

関心の少ないGoals



比較的関心の少ないテーマとして、⑰パートナーシップで目標を達成しよう(9.0%)、⑫つくる責任つかう責任(14.3%)、⑨産業と技術革新の基盤をつくろう(14.8%)が挙げられます。

ただし、本当に関心が低い、というわけではなく、文言だけではイメージの湧きにくいGoalsの数値が低くなっている印象です。SDGsの学習を進め、それぞれのGoalsについて理解を深めることが重要です。

増加の大きいGoals ～気候変動に具体的な対策を～



前年からの増加が大きいテーマとして、⑬気候変動に具体的な対策を(5.4ポイント増)、④質の高い教育をみんなに(4.0ポイント増)、⑤ジェンダー平等を実現しよう(3.8ポイント増)が挙げられます。

⑬気候変動に具体的な対策をの増加要因として、2019年8月の九州北部豪雨、2019年9月の台風15号・19号などの影響により、自然災害への危機感が高まっていることが考えられます。

概要報告のwebページには、[男性/女性/文系/理系/医歯薬系]の分類別でのデータも掲載されています。是非ご覧ください。

(右の2次元バーコードからもアクセスできます。)



第55回学生生活実態調査 概要報告
<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>



各論編

●各論ページの見方

ここからは、SDGsの17の目標(ゴール)について1つ1つ学習しできることを考えるページです。



Goal 1 貧困をなくそう NO POVERTY

●この目標(Goal)の解説

目標「貧困をなくそう」は、あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困を終わらせるという目標です。2000～15年のMDGs、2016～30年のSDGsともに一連目の目標は貧困問題となっており、21世紀前半の国際社会は貧困が最も重要な課題であり、早急かつ根本的な解決を目標とする意図が示されています。

日本国内での課題は、相対的貧困です。2015年には相対的貧困ラインは12.2万円、それ未満の貧困層は全世帯の15.6%(779.5万世帯)、子供は13.9%です。特に深刻なのは、母子家庭などのひとり親世帯や、年金だけが頼りの高齢者世帯です。また、ターゲット1.2「各国定率によるあらゆる次元の貧困1.0」、日本政府の定率を定めていないことや、政府のSDGs推進本部が作成・発表したSDGs実施指針が定める優先8分野には貧困が含まれていないことなど、日本の貧困に対する関心の低さも問題となっています。

また、ターゲット1.1では、極度の貧困状態(1日1.25ドル未満で生活している人)を2030年までに終わらせることを掲げています。2015年には7.36億人(総人口の10.0%)でしたが、国連はこれまでの傾向が続くと2030年には6%にとどまってしまうと予想しています。まずは世界の現状を知ることがとても重要です。

日本でも多くの団体が医療、教育などの寄付やサポートのための活動を行っています。また、それらの支援活動は多くの人の寄付やサポートにより成り立っています。支援団体に寄付や募金をするなど、私たち一人ひとりの行動が、苦しんでいる多くの人々を救う力になります。



1 貧困をなくそう

●大学生協での実践事例

三重短期大学生協 UNICEF街頭募金

UNICEF協会の方と協力して、津駅前では募金活動を実施し、合計で8,304円を集めることができました。また、寄付してくれた人へハンフレット(花の種つき)を配布しました。大々外で活動を行うことで、幅広い年齢層の方から募金をいただくことができました。

長根大学生協 ユニセフ募金

学生委員会メンバーが募金箱を持ってユニセフ募金を呼びかけました。ショップの前など校内2か所に設置した募金のブースにはユニセフの取り組みの取組(募金をするとどうなるかを視覚的に解説しました。関連するクイズとアンケートも併せて実施し、答えてくれた参加者には賞券で贈る体験用優待券をプレゼント。また、東海短期中法学生委員会のTwitter上でユニセフ(国際児童基金)のホームページの紹介等も行いました。

●この目標に対して私たちができること

※私たちができること/自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう!

univ.CO-OP SDGs Handbook 15

●この目標(Goal)の解説

それぞれの目標(Goal)についての解説を説明しています。SDGsのGoalの一つとして設定された背景や歴史的経緯について説明しています。また、現在の地球社会が抱えている問題や、その解決のために設定されている具体的なターゲットについても解説があります。

まずはこの解説を読んで、一人の地球市民としてできることは何か・求められる役割は何かを考えてみましょう。

●大学生協での実践事例

全国の大学生協における実践事例を紹介しています。全国の大学生協では、様々な取り組みを通じて持続可能な社会の実現を目指しています。

これらの取り組みの中には、SDGsという目標が設定される以前から取り組まれてきたものも多くあります。改めて、大学生協の理念や価値(大切にしてきたこと)とSDGsのつながりを確認し、それぞれの大学生協でできることを考えてみましょう。

●この目標に対して私たちができること

それぞれの目標(Goal)について、一個人としてできることや自分の大学・大学生協でできることを考えてみましょう。

なお、SDGsの特徴として、17の各目標に対しそれらを達成するために必要な具体目標(ターゲット)が、それぞれ5から10程度、計169設定されていることが挙げられます。具体的な行動に移すために、数値目標などを設定した細かいターゲットが用意されています。このハンドブックを見て、さらに気になった人は文献やインターネットを活用して学習してみましょう。

●それぞれのGoalの特徴を踏まえよう!

- 開発途上国の基礎的な目標が中心
- 先進国にとっても取り組むべき課題
- グローバルな課題



SDGsにはそれぞれのゴールに特徴があります。開発途上国を中心とした目標であったMDGsを引継ぎ、先進国にも必要な課題やグローバルな課題を盛り込んだSDGsは、それぞれのGoalの特徴に応じて見ていくことが重要です。各ゴールについて学習する上でそれぞれのゴールの特徴を意識してみましょう。

目標 1

貧困をなくそう

NO POVERTY

1 貧困をなくそう



●この目標(Goal)の解説

目標1「貧困をなくそう」は、あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困を終わらせるという目標です。2000～15年のMDGs、2016～30年のSDGsともに一番目の目標は貧困問題となっており、21世紀前半の国際社会は貧困が最も重要な課題であり、早急かつ根本的な解決を目指す決意が示されています。



日本国内での課題は、相対的貧困です。2015年では相対的貧困ラインは122万円で、それ未満の貧困層は全世帯の15.6%(779.5万世帯)、子供は13.9%です。特に深刻なのは、母子家庭などのひとり親世帯や、年金だけが頼りの高齢者世帯です。また、ターゲット1.2「各国定義によるあらゆる次元の貧困」の、日本政府の定義を定めていないことや、政府のSDGs推進本部が作成・発表したSDGs実施指針が定める優先8分野には貧困が含まれていないことなど、日本の貧困に対する関心の低さも問題となっています。

また、ターゲット1.1では、極度の貧困状態(1日1.25ドル未満で生活している人)を2030年までに終わらせることを掲げています。2015年では7.36億人(総人口の10.0%)でしたが、国連はこれまでの傾向が続くと2030年には6%にとどまってしまうと予想しています。まずは世界の現状を知ることがとても重要です。

日本でも多くの団体が医療、教育などの極度の貧困から救うための活動をしています。また、それらの支援活動は多くの人の寄付やサポートにより成り立っています。支援団体に寄付や募金をするなど、私たち一人ひとりの行動が、苦しんでいる多くの人々を救う力になります。

●大学生協での実践事例



三重短期大学生協 UNICEF街頭募金



UNICEF協会の方と協力して、津駅前前で募金活動を実施し、合計で8,304円を集めることができました。また、寄付してくれた人にパンフレット(花の種つき)を配布しました。

大学外で活動を行うことで、幅広い年齢層の方から募金をいただくことができました。



島根大学生協 ユニセフ募金



学生委員会メンバーが募金箱を持ってユニセフ募金を呼びかけました。

ショップの前など学内2か所に設置した募金のブースにはユニセフの取り組みの説明(募金をするとどうなるか)を掲示して解説しました。関連するクイズとアンケートも併せて実施し、答えてくれた参加者には食堂で使える小鉢引換券をプレゼント。また、実施期間中は学生委員会のTwitter上でユニセフ(国際児童基金)のホームページの紹介等も行いました。

●この目標に対して私たちができること

👉私たちができること/自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう!

2 飢餓を ゼロに



目標 2

飢餓をゼロに

ZERO HUNGER

●この目標(Goal)の解説

この目標の達成は、「世界中のすべての人が、栄養のある適切な食料を十分に持続的にいつでも手に入れられる状態」を指します。現在、世界で十分な食料を生産しているにも関わらず、飢餓人口は8億2,160万人に上り、9人に一人が飢餓に苦しんでいます。更に、2014年以降飢餓人口は増加を続け、10年前の状況に逆戻りしてしまいました。これは、極端な異常気象や紛争や景気後退などが主要因とされています。

目標が達成されない限り、人間は人間らしい社会的生活はおろか、生存すらも危ぶまれる状況です。農業部門への公的支援を行い、農業関係者の権利を守りながら「飢餓を終わらせ、食料安定保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進すること」が目標です。

目標2は農業従事者や栄養関係者のみで実現はできず、目標12の「持続可能な消費と生産」と密接に関わっています。目標を実現するためには、食に関わる過程で「取り残された層」の人権を守り、「誰一人取り残さない」ための方法を、当事者と共に考え、行動することが重要です。日本は栄養状態が良い国の一つです。しかし、食料自給率は約37%で半分以上をを海外からの輸入に頼っています。一方、捨てられてしまう食べ物は年間643万トンに及び、毎日1人1杯のご飯を捨てている計算です。

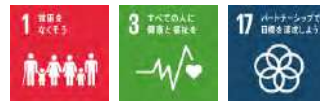
日本の豊かな食生活を保つために、他の国の自然環境や健康状態を犠牲にしている現状は、持続可能な方法と言えるでしょうか。「飢餓をゼロに」するために私たちができること。それは、世界の飢餓状況について調べること、毎日食べているものは、誰がどこで作っているのかを知ること。食べ物を無駄にせず、環境マークのついた製品を選択すること。また、確実に成果を上げていくためには、目標17にある通りグローバル・パートナーシップのもとで、国際機関、企業、NPO/NGOなど、多様な立場が知見や技術、資金を出し合って進めていくことが必要です。

日本の豊かな食生活を保つために、他の国の自然環境や健康状態を犠牲にしている現状は、持続可能な方法と言えるでしょうか。「飢餓をゼロに」するために私たちができること。それは、世界の飢餓状況について調べること、毎日食べているものは、誰がどこで作っているのかを知ること。食べ物を無駄にせず、環境マークのついた製品を選択すること。また、確実に成果を上げていくためには、目標17にある通りグローバル・パートナーシップのもとで、国際機関、企業、NPO/NGOなど、多様な立場が知見や技術、資金を出し合って進めていくことが必要です。

●大学生協での実践事例



京府立医科大学・府立大学生協(府立大) TFT学生団体との取り組み



「社会的課題を解決したい」という想いを形にした取り組みです。この取り組みを実施するために、想いが一致した学内のTFT団体と協力して行いました。TFT団体にリリパック容器のヘルシーお弁当を考案してもらい、1週間購買で販賣しました。1食ごとに20円が発展途上国に寄付できる取り組みです。学生委員会は小規模組織でありながらも、ステイクホルダーと協力することで、取り組みの幅を広げることができたのもポイントです！



熊本大学生協 TFTおにぎりアクション

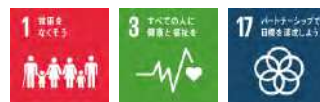


TABLE FOR TWO (以下、TFT)を通して、健康増進、国際貢献、地球規模の課題に目を向けるきっかけにしてほしいという想いで、世界食糧デーの10/16にTFTやおにぎりアクションに絡めたメニューの販売を行いました。

取り組みにあたり、事前に打ち合わせも重ねることで、学生とパートさんが一緒に関わったこと、組織部員全員がおにぎりアクションの仕組みを理解したうえで取り組めたこと、がポイントです！

●この目標に対して私たちができること

👉私たちができること／自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう！

目標 3

すべての人に健康と福祉を

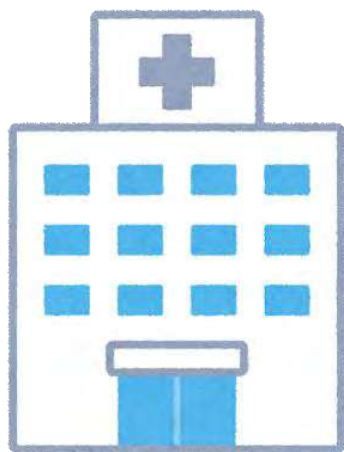
GOOD HEALTH AND WELL-BEING

3 すべての人に
健康と福祉を



●この目標(Goal)の解説

目標3では、あらゆる世代のすべての人が健康であり、福祉を受けられることを目指しています。その目標は、特定の疾病・健康問題に止まらず様々な項目に渡り、全方位から健康を保とうとしています。



具体的な項目は、「妊産婦・新生児の死亡率」、「伝染病・感染症」、「生活習慣病による死亡率」、「薬物・アルコール」、「事故」、「性・生殖」、「汚染による疾病」といったものがあります。これらにより命を落とす人をどれだけ少なくできるか、また保健サービスをどれだけ広く利用できるようにするかが指標となっています。

「ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ (UHC)」という全ての人々に対してお金の心配なく必要な保健医療サービスを受ける体制を作ることも目指しています。これは途上国で質の高い基礎的な保健サービスや安価で良質なワクチンを届けることだけでなく、我々大学生協でのたすけあいによる学生総合共済も、すべての学生がお金の心配なく保健サービスを受けられる仕組みといえます。

また、海外では「シンデミック (地球規模での疾病と社会的要因の相乗効果)」という途上国での生活習慣病の悪化が環境汚染や食糧構造の偏りによって引き起こされているという課題があります。全ての人に健康と福祉を届けるためには、様々な視点から起こりうる影響を考え、原因となるような構造的な要因にもアプローチして行く必要性が訴えられています。

●大学生協での実践事例



北見工業大学生協

新型コロナウイルス感染症に対応した食堂営業

学長・副学長も参加する大学危機管理委員会に感染拡大早期の段階からコンタクトをとり、体育館での教科書販売を行いました。また、自宅待機期間の食堂閉店を求められましたが、95%を占める自宅外生からの生の声を伝え、理事長と一緒に大学に相談しています。大学と連名でのコロナ対応ポスター等も作成しました。コロナ禍の営業でも、食堂利用の8割程度がカバーできるような営業計画を立てて営業を継続することができました。



福岡県立大学生協

健康フェスタ

福岡県庁や福岡県警、地域の病院のほか、心理コース・看護学部の教員の方々、大学の保健室と協力し、専門的な内容を盛り込んで、組合員が自身の健康に目を向けられる取り組みです。きっかけとしては、看護学科の先生のつながりで病院の方と協力できるようになり、学生委員会だけではできない取り組みを行えました。組合員同士や地域のつながりを活かすことで、より多くの組合員が健康について考えることができていました。



●この目標に対して私たちができること

👉私たちができること／自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう！

4 質の高い教育を みんなに



目標 4 質の高い教育をみんなに

QUALITY EDUCATION

●この目標(Goal)の解説

この目標では、若年層から成人に至るまで、生涯学べる機会や環境を保障し、市民が自分自身を高め、自分の望む人生を歩んでいくことができることをめざしています。



SDGsの前身であるMDGsや、「万人のための教育(EFA)」が掲げられて以降、世界では初等教育の就学率や成人識字率に一定の改善がみられました。しかしながら、世界では未だに6,100万人の子どもが小学校に通うことが出来ず、内2,500万人は一度も学校に通うことなくその生涯を終えていくとされています。また、成人のおよそ1/6が読み書きができないとされており、これについてもジェンダー格差や地域格差が依然として存在しています。目標4では、「教育」の定義に高等教育へのアクセス拡大や職業教育・訓練の充実も含め、従来のMDGsやEFAよりも幅広い、まさしく「誰一人取り残さない」を体現したものとなっています。

日本においても、この目標4の達成に関しては依然課題が存在します。待機児童問題や高校無償化問題などは、その具体例といえるでしょう。こうした日本にもある課題に取り組む中で、より多くの人々が自分たちの身近なものとして目標4を捉えることが出来ます。

さて、目標4では従来よりも教育の定義が拡大したことに合わせ、必要となる資金も多くなってきます。しかし、途上国においては財源が足りないため、日本を含めた豊かな国の支援が必要となってきます。そのために、目標17でも掲げられている、豊かな国は「ODAとして拠出する」という約束を果たし、さらに教育への援助額を6倍に増やす必要性があります。

●大学生協での実践事例



北海道教育大学生協(旭川校) SDGs学習会 in こば交流会

学生委員、教職員、生協職員の3者が大学生活をよりよくするための交流会を行いました。SDGsの解説をするだけでなく、身近に感じてもらうために、国連広報センターにあるすごろくを用いて、よりSDGsに対して楽しくわかりやすく学んでいました。

ただSDGsを学ぶだけでなく、一緒にSDGs達成していくために教職員と学生委員が関係づくりする場にもなっていました。



名古屋大学生協 学際交流企画 AIM

-Academic Integration Meeting-

学部4年生、大学院生を中心に、参加者が自分の研究の紹介を行い、参加者同士で交流を行う、という企画を行いました。分野を超えた研究や学びの交流・議論が活発に行われ、参加者にも好評でした。新たな知識を得て教養を深めたい、という参加者が多く、自分の専門外の研究を知ることで新たな知見を得ることができました。



●この目標に対して私たちができること

👉私たちができること/自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう!

Goal 5

ジェンダー平等を実現しよう

GENDER EQUALITY

5 ジェンダー平等を実現しよう



●この目標(Goal)の解説

目標5「ジェンダー平等を実現しよう」は、すべての人が性に基づく偏見、差別、不平等を受けることなく、それぞれの可能性を开花させ、自らの選択に基づいて尊厳ある人生を送ろうというものです。世界的にも多くの課題が残っている目標であり、日本も最低評価を受けている現状があります（持続可能な開発報告書2019による）。

日本での最重要課題は、政治での意思決定レベルでの男女の平等な参加促進があります。他には、性別に基づいた固定観念や性別分業意識の払拭、無償のケア労働の公平な分担、女性に大きく偏っている非正規労働の是正、同一労働・同一賃金に代表される雇用の場での基本的原則の徹底が挙げられます。長時間労働の解消とディーセントワーク（働きがいのある人間らしい仕事）の実現を通じて、女性、男性、すべての人が仕事と生活を両立させることも重要です。

同時に、世界のジェンダー課題にも目を向けることも重要です。女性の可能性が閉ざされ、場合によっては命が脅かされる状況が存在することを知り、世界と日本のジェンダー平等、そして女性のエンパワーメントを共に考える視点が大切です。

また、ジェンダー平等は分野横断的課題でもあります。目標10(不平等)を筆頭に、目標3(健康)、4(教育)、6(安全な水)、12(つくる責任・つかう責任)はその代表的なものです。すべての目標のジェンダー課題を理解し、その根本にある構造的な問題の変革に向けて、大胆に取り組むことが求められます。UN Womenは、目標5を「開発と進歩の重要な推進役」と表現しています。ジェンダー平等は、「誰一人取り残さない」持続可能な開発の鍵なのです。



●大学生協での実践事例



奈良女大学生協

トランスジェンダー学習会

大学でトランスジェンダー学生の受け入れが2020年4月から開始されるにあたり、生協の対応についての学習会を開催しました。生協職員や学生委員会、上級生委員会、ブロック事務局、共済連、事業連合職員、他大学の学生理事など総勢100名での学習会となりました。

副学長からは『SOGI、LGBTとはどういうものか』や『生協としての配慮課題』について講演いただき、弁護士の方からは憲法の視点から見る人権の問題についての講演やワークをしていただきました。SOGI、LGBTの方々の存在や困難な状況を知ることで、多様な組合員を理解し、組合員ひとりひとりを尊重するために生協でできることを考えることができました。



●この目標に対して私たちができること

👉私たちができること／自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう！

6 安全な水とトイレ を世界中に



Goal 6 安全な水とトイレを世界中に CLEAN WATER AND SANITATION

●この目標(Goal)の解説

水は生活する上で必要不可欠であり、安全な水がなければ健康でいられません。目標6では、「すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」ことを目標としています。

日本では安全な水とトイレ、衛生設備が整った環境を当たり前のように使用できます。しかし世界には、安全に管理された飲み水とトイレがない国や地域が多く存在します。「安全に管理された水（必要な時に自宅で使用できる汚染されていない飲み水）」には約22億人、「安全に管理されたトイレ（安全で衛生的に処理できる設備がある）」には約42億人がアクセスできていないと言われています。

目標6では、2030年までに「すべての人々の、安全で安価な飲料水の普遍的かつ平等なアクセスの達成」を目指しています。実現するためには、水を清潔にするだけでなく、下水施設や衛生施設を利用しやすくしたり、安全に水を管理する仕組みを整えたりする必要があります。また水質を改善するために、山地、森林、河川、湖沼など水に関連する生態系の保護や回復を行うことも大切です。この生態系の保護・回復は2020年までに達成することを目標として掲げています。開発途上国における水と衛生分野に関する課題解決や目標達成のためには国を越えた連携や投資も必要です。さらに、水の確保は女性や少女の仕事である地域が多く、女性が教育・就労の機会を失う原因にもなります。目標6を達成することは、安全な水と衛生施設の利用だけでなく、ジェンダー平等にもつながるのです。



●大学生協での実践事例



宮城大学生協(大和キャンパス) ウォーターエイド募金大作戦!!

大学祭の出店での売上の一部を国際NGOのウォーターエイドへ募金した取り組みです。レジュメを作成・来場者への配布をして、日本では感じにくい世界の水問題とウォーターエイドの取り組み、大学生協に関わる私たちが募金をする意味を紹介しました。来場者への、出店の呼びかけの際にも声に出してこの取り組みを紹介をしました。

「たすけあい」を大事にした、大学生協らしい取り組みです。



富山大学生協 事業体として下水処理を見つめ直した取り組み

生協食堂での排水処理の在り方を、組合員を巻き込みながら大学一丸で対策に取り組んだ事例です。排水中のノルマルヘキサン抽出物質の基準値オーバーをきっかけに、大学と共に学習会を実施したり、排水設備の清掃や増設、ノンオイルドレッシングへの変更など生協食堂での生協の取り組みを徹底的に見つめ直し、改善を行いました。学生委員会もポスターを製作し学生への啓もう活動に励みました。



●この目標に対して私たちができること

私たちができること / 自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう！

Goal 7

エネルギーをみんなにそしてクリーンに

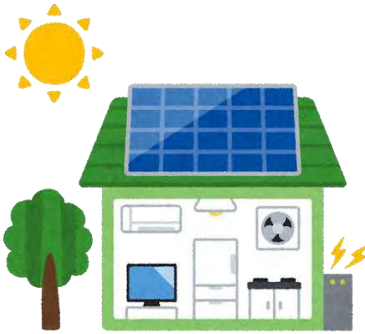
AFFORDABLE AND CLEAN ENERGY

7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに



●この目標(Goal)の解説

目標7では、世界の全ての人々が、人々や自然への悪影響に繋がらない「持続可能な」エネルギーを安定的に利用できるようになることを目指しています。これは他の目標の達成の前提にもなります。



電気や燃料をはじめとするエネルギーを使えることは、現代社会において人々が豊かな暮らしをおくるための大事な条件です。

現在のエネルギーの主役である化石燃料は、環境破壊を引き起こし、化石燃料を消費することによる二酸化炭素排出は、気候変動の最大の要因となっています。化石燃料からの世界的な移行を脱炭素化といい、脱炭素化・再生可能エネルギーの拡大を目指すとともに、途上国の技術向上や基盤の整備に向けた国際協力の必要性が掲げられています。

私たちの身の回りにあるエネルギーとして、電気があげられます。日常に寄り添う大学生協は、企画や発信など様々な形で、エネルギーを身近に考えてもらうためにアプローチできます。そのためにも、まずは一人ひとりがエネルギー問題に関心を持ち、暮らしの中で無駄な電力を使っていないか確認し、行動に移すといった「個人の意識」が大切です。

エネルギーの種類をよりクリーンで効果的な利用に切り替えていくことは、全世界的な取り組みの中で進展を見せるものの、ペースの加速が求められています。

●大学生協での実践事例



全国大学生協連 ふくしま被災地スタディツアー



普段の生活で原発事故やそれによって生じている問題・課題を思い出すことが少なくなっている今、津波と原子力災害の複合災害を受けた「ふくしま」について正しい情報の理解と共感を広めることなどを目的としたツアーを行っています。原子力発電というエネルギーの作り方についての知識を得て自分たちの考えを様々な人と交流する場としても設けられています。



全国各地の大学生協 廃油を活用した取り組み



多くの大学生協では、食堂から出た廃油を再利用してキャンドルを作製して夕方から夜にかけて行われる組合員交流企画で活用しています。その多くは、廃油を使っていることを伝えることで、資源の大切さを感じてもらったり、リサイクル・エコ活動に興味を持ってもらうことを目的としています。また発電に利用している大学生協もあります。

(写真は愛媛大学生協の「キャンドルナイト」での写真です。)

●この目標に対して私たちができること

👉私たちができること／自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう！

8 働きがいも 経済成長も



Goal 8 働きがいも 経済成長も

DECENT WORK AND ECONOMIC GROWTH

●この目標(Goal)の解説

この目標8は継続的な経済成長の実現を目指すと同時に男女や障がい者の壁を越えたすべての人々の生産的な雇用とディーセント・ワーク(働きがいのある人間らしい雇用)をもたらすことを目標としています。

目標8は「包摂的かつ持続可能な経済成長及び全ての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用(ディーセント・ワーク)を促進する」ことを目標としています。しかし何が何でも経済成長をすればいいという問題ではありません。なぜなら経済成長だけを追求してしまった結果が大量生産・大量消費なのです。これは持続可能ではないうえ、環境にもよしくありません。つまり目標8における経済成長とは環境や人権の尊重などにも配慮しなければならないのです。



先進国である日本はこの目標に対してどのような課題があるのでしょうか？日本の非正規雇用率は38.2%となっています。つまりパートやアルバイトといった低賃金かつ不安定な労働条件のもとで働いている人が約2179万人もいるということです。さらにこの非正規雇用労働者の約68%は女性が占めており、女性の経済的地位向上が課題となっています。また障がい者の民間企業の法定雇用率が2.2%と海外と比べて低く設定されているにも関わらず、それすらも達成できていない企業が52%もあります。さらに日本はいわゆる「ひきこもり」が15～39歳で約54万人、40～64歳で約61万人に達するほどの現状です。これらからターゲットの8.5の実現には程遠い現状であることが分かります。日本もこの目標のキーワードである「ディーセント・ワーク」の実現には数多くの課題が残っているのです。

●大学生協での実践事例



宇都宮大学生協 ビジョンナビゲーションセミナー

大学入学後、「社会に出るまでに何を目標として大学生活を過ごせばよいか分からない」という学生が多いという実態を把握し、大学生活を自分なりにデザインした先輩の経験を伝える場としてビジョンナビゲーションセミナーを実施しました。様々な経験を持った先輩学生が新入生に経験を伝えるだけでなく、自分自身を成長させるためのマインドセットについての学習会やSEQを活用した自己分析なども行いました。



長崎県立大学シーボルト校生協 就活フェスタ

上級生が起案し、上級生向けの取り組みを行うことで3、4年生に生協を身近に感じてもらうことを目指し、興味関心の高い就活についての取り組みを行いました。そのため、組合員が自分の行動やなりたい姿、将来について考えるきっかけにすることができました。企画内容も企業と協力したり、大学の就職課と協力したり、上級生・下級生がお互いに連携したりすることで、より多様な組合員を巻き込める工夫がされていました。



●この目標に対して私たちができること

👉私たちができること／自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう！

Goal 9

産業と技術革新の基盤をつくろう

INDUSTRY, INNOVATION AND INFRASTRUCTURE

9 産業と技術革新の
基盤をつくろう



●この目標(Goal)の解説

生活や産業などの経済活動を営む上で不可欠な社会基盤（インフラ）を整備することで、以前は取り組めなかった貧困、教育、医療アクセス等の諸課題の対処・福祉の増進を目指す目標。

インフラとは、生活や産業などの経済活動を営む上で不可欠な社会基盤、公共の福祉を目的として、整備・提供される施設のことを指します。

（例：道路、鉄道、上下水道、電気、電話網、通信網、学校、病院、湾港、ダム）

現在、世界には約26億人が不安な電力供給の中で生きていたり、約8億人が安定して水を得られない生活をしています。インフラ整備の不足によって、子どもが井戸から水を汲むために学校へ通えなかったり、産業化の遅れとともに経済成長も遅れてしまう等の問題が起きています。

【基礎インフラの整備によって】

「生活水準の向上」と「持続可能な産業発展に繋がる技術革新」の実現を目指します。

【インフラ整備で実現することの例】

- ・上下水道の整備で安全な水の確保が簡単になり…
子どもが学校に行けるようになったり、大人が働く時間を作ることができます。
不衛生な水を飲まずに済み、病気のリスクを下げることに繋がります。
- ・電気、電話網、通信網が整備されることで…
インターネット等を活用した技術革新が可能になり、産業化と雇用増加に繋がります。



不安定なインフラ
揺れる生活

●大学生協での実践事例



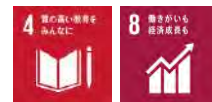
東京工業大学生協 研究室紹介冊子LANDFALL

大学生の一番の悩みといえば、研究室（ゼミ）選びです。未来の技術者を支えるために、東工大の研究室の実態や研究内容を紹介する冊子を作っています。また、この冊子は、組合員自身が自分たちで研究室に足を運び、教職員の方々と直接話を伺うことで、公正公平な情報を自分たちの仲間のために発信することを心がけています。産業と技術革新の基盤をつくっていく、研究生の生活を支えるための取り組みです。



大阪大学生協 System Solution Team

学生が大学生協の事業環境に身を置き、具体的なミッションを持ち、目標数値管理を行い、成功体験を獲得することで社会経験を積むインターンシップ制度として学生自身がシステム開発を行っています。プログラミングを通じて実際に大学内で稼働するシステムを開発し、かつ社会人基礎スキルを身に付ける機会となっています。開発したシステムは、大学の校費に関するシステムなど、大学・大学生協を支えるものになっています。



●この目標に対して私たちができること

🎯 私たちができること / 自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう！

10 人や国の不平等をなくそう



目標 10 人や国の不平等をなくそう

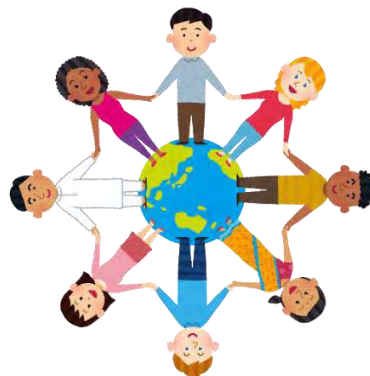
REDUCED INEQUALITIES

●この目標(Goal)の解説

「世界で最も裕福な1%の人が持つ富の合計は、その他の69億人が持つ富の合計の2倍以上」国際NGOオックスファム・インターナショナルは世界の貧困と格差に関するデータを毎年公表しており、前文は2020年版で公表されたデータです。現在、富裕層とその他の人々の格差は想像を絶する規模になっています。目標10ではグローバル経済の中で拡大した各国内、そして各国間の不平等の是正を目指しています。

不平等の原因は性別、年齢、民族、人種、宗教、障がいなど様々です。しかし、「誰一人取り残さない」世界の実現のためには原因に関わりなくすべての人の社会的、経済的、政治的な包含を促進する必要があります。目標10のターゲットには、グローバル経済の構造全体の問題への対処が含まれています。富裕層に有利に働く現在の構造を改善することで、国家間、国内間など幅広い不平等の解決を目指しています。他にもすべての人が平等に豊かさを享受できる世界を目指して機会均等や移民政策、社会保障政策などに関するターゲットが設定されています。しかし、日本の現状を見てみると、非正規雇用と正社員の間での賃金や待遇の格差、高齢者の貧困率の上昇、7人に1人の子どもが相対的貧困、つまり標準的な生活を送れていない状況にある人が多いなど、多くの課題が残っています。

目標10は他の目標を達成するための基礎となる目標です。達成するために行われている身近の例として発展途上国の原料や製品を適正価格で継続的に購入する、フェアトレードが挙げられます。生産者や労働者に適切な賃金が支払われることで、労働環境の向上や、児童労働の撤廃、そして教育を受ける機会均等にも繋がります。



●大学生協での実践事例



埼玉大学生協 ハートフルプロジェクト

組合員が、障がい者の方の活動を知り、身近に感じることで、障がい者の方を取り巻く社会問題について考えるきっかけを作るために行われた取り組みです。多様な人々が、福祉のクッキーを通じて出会い、「まぜこぜ」になって暮らす社会を実現を目的に設立されたクッキープロジェクトという団体と協力し、クッキーの販売や学生委員会作成の冊子を配布するなど、組合員が障がい者の方の活動を身近に感じるきっかけを作りました。



立命館生協 ドライフルーツプロジェクト

一見ハードルの高そうな「国際貢献」を身近に感じてもらうための企画です。学内の国際協力団体と企業と連携し、フェアトレードのドライフルーツを提供しました。フェアトレードの仕組みを説明し、私たち学生でも出来ることを実感してもらえるようにしました。企画終了後に利益の一部は協力していただいた団体を通じてカンボジアに寄付されたということ組合員に伝え、自分たちの行動が世界に繋がっていること、「国際貢献」のハードルは案外低いということを感じてもらいました。



●この目標に対して私たちができること

👉私たちができること／自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう！

Goal 11

住み続けられるまちづくりを

SUSTAINABLE CITIES AND COMMUNITIES

11 住み続けられる
まちづくりを



●この目標(Goal)の解説

普段当たり前のように使っている電気やガス、水道や交通、廃棄物処理など、基本的なサービスをみんなが受けられるような社会を目指します。また、スラム街の状況を改善したり、災害への対応を強化することも含まれます。



この目標で焦点を当てているのは私たちの「居住空間」です。上記にもあるように、普段私たちが使っている基本的なサービスを、地球に住むすべての人が受けられるように、一部の地域や国に偏ることなく（目標10との兼ね合い）進めていく必要があります。世界中にスラム生活者は10億人に及ぶといわれています。スラム生活者の改善には大規模な投資が必要ですが、今の私たちからすると実現には少し遠いことのように思います。この目標で、私たちだからこそ実現できることは気候変動などの災害へ対応する力です。年々増加する台風被害などの自然災害は今の私たちだけでなく後世にまで被害をもたらす危険があります。自分が住む町のハザードマップを見たり、いざというときの避難場所や避難経路の確認をしたり、非常用持ち出し袋を備えたりするなど、できることはたくさんあります。様々な災害が起こりうる今、自分ごとに捉えて準備をすることが大切です。災害が起こってしまったのは遅いのです。私たちのこうした小さな取り組みが、教訓として受け継がれ「住み続けられるまち」の実現に近づくと考えます。

●大学生協での実践事例



滋賀県立大学生協 防災と君と秋

災害が多い現代社会において防災の大切さを組合員に知ってもらうために取り組みました。「住む町」のリスクを知るために、実際に市役所の危機管理課を訪れました。災害時の写真やハザードマップの展示、防災バッグの中身の紹介、非常食が当たる抽選会を行いました。抽選カードは防災に関する豆知識を紹介するカードにしました。



甲南大学生協 1・17防災の取り組み

1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災にむけて、記録や災害への備えをパネルや避難所再現をまとめ、震災の写真展を開催しました。また、復興アクションとして、食堂でひまわり油のこくうまみそ汁を提供しました。ひまわりは阪神・淡路大震災の復興の象徴とされており、組合員に身近なところから震災について考えるきっかけを作っていました。取り組みの当日もひまわりの種を植え、想いの継承が行われていました。

取り組み当日に種まきを行ったひまわりが咲きました！

●この目標に対して私たちができること

👉私たちができること／自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう！

12 つくる責任 つかう責任



Goal 12

つくる責任 つかう責任

RESPONSIBLE CONSUMPTION AND PRODUCTION

●この目標(Goal)の解説

目標12「つくる責任、つかう責任」は、これまでの大量生産・大量消費・大量廃棄による資源の枯渇、環境破壊や人権問題をもたらしてきた生産消費のあり方を変えようというものです。目標12は、日本を含めたOECD(経済協力開発機構)諸国のほとんどが最低評価である(持続可能な開発報告書2019より)という現状があります。

日本の取組みは、食品ロスやフェアトレードなどの個別課題の取り組み、「持続可能な消費」の協調、また「生産」と「消費」の分断した取り組みなどが特徴として挙げられます。生産消費の変革に向けた実践例が少ないのが課題です。

目標達成に向けて、第一に「持続可能な生産・消費への移行」が挙げられます。従来の経済成長を支えてきた大量生産・大量消費から移行するためには、企業、消費者、行政が一体となって取り組む必要があります。廃棄やロスに焦点を当てるだけでなく「天然資源の持続的な管理および効率的な利用の実現」「持続可能なライフスタイル」などのターゲットにも関連させることが大切です。

第二に「他の目標と他のターゲットとの連動」が挙げられます。他の目標、ターゲットなどとも関連させながら相乗効果を上げていく工夫が、SDGs達成への取り組みをステップアップさせるために必要です。例えば目標12のターゲット「天然資源の管理」や「環境上適正な化学物質の管理」は目標3,13,14,15とも関係しますが、これまでは啓発にとどまり、これらの目標の解決につなげるまでには至っていません。持続可能な生産消費への移行に役立つ知識、ツールや経験を共有し、相互の目標をつなげていく実践が求められます。



●大学生協での実践事例



宮城大学生協(太白キャンパス) ハロウィン企画

10月31日のハロウィンに合わせて、食堂利用者に売店で廃棄される予定だったお菓子などの食べ物を無償で配布した取り組みです。この取り組みで配った食べ物は、いずれも賞味期限前で廃棄時点でもまだまだ安心して食べることができることをレジュメと共にお渡しの際にお伝えし、取り組みを通じて食ロスの削減や環境への興味関心を持つ組合員を増やしました。



東京農業大学生協 TABETEを活用した食品ロス削減 の取り組み

大学の食堂でも食品ロスの問題について関心を持ち、取り組もうと、フードロス対策アプリ「TABETE」を活用して夕食営業のロスを削減しました。余った食材をお弁当に詰め、アプリを経由して提供しました。アプリの導入に際しては、学長や食品ロスの問題を研究する大学教員や研究室の学生が働きかけ、組合員に食品ロスについてアンケートを取りました。企業と教員-学生と生協と一緒に食品ロスを削減する動きが広がっています。



●この目標に対して私たちができること

👉私たちができること/自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう！

Goal 13

気候変動に具体的な対策を

CLIMATE ACTION

13 気候変動に
具体的な対策を



●この目標(Goal)の解説

気候変動による様々な災害は年を追うごとに多くなりつつあることから、取り組みの大小を問わず国際的に早急な取り組みを行う必要があります。目標13は気候変動とその影響に立ち向かうため、対策を取ることをテーマにしています。

気候変動には、気温の上昇・海面水位の上昇・異常気象などがあります。それにより農業生産・飲料水の確保・生態系など様々な面で世界的に大きな影響を与えています。中でも特に大きな問題となっているのは気候変動関連の災害です。近年、極端な気象現象(台風等)とそれに伴う被害(多数の死者や負傷者、交通網の麻痺、食料・飲料水・灌漑用水の不足、生物多様性の損失等)も増え、経済面でも大きな影響が出ています。それらの主な原因は、人類の活動により増えすぎた温室効果ガス(GHG)によって地球温暖化が進んでいることにあります。特に温室効果ガスの約76%を占める二酸化炭素の排出量が産業革命以降増加の一途をたどっていることが大きな要因です。

目標13では、そんな温室効果ガスの排出を原因とする地球温暖化現象が招く世界各地での気候変動やその影響を軽減することを目指しています。実現のための取り組みとして、2016年に気候変動抑制に取り組むための国際的な協定であるパリ協定が発効され、産業革命前からの平均気温上昇を2℃未満に抑えることを目標に各国の温室効果ガス削減目標が立てられました。日本でも2030年度の温室効果ガスの排出量を2013年度の水準から26%削減することを定め、省エネに取り組んでいます。

気候変動は地球に暮らす全ての生物に大きな影響を与えています。全ての生物が暮らしやすい環境に向け世界規模の早急な対策が必要です。



●大学生協での実践事例

岡山大学生協 MottaCa



組合員の多くは、入学準備の1つとして生協加入・共済加入を行うため、大学生活のリスクやそれに対する備えを“じぶんごと”として捉える最初のきっかけを逃している人も多いです。自分が共済に入っているか分からなかったり、給付申請忘れが発生したりしてしまうこともしばしばあります。そのような課題がある中、2018年にはキャンパスがある岡山を豪雨が襲いました。津島キャンパス北側の半田山で土砂崩れが発生し、岡山も災害とは無縁ではないと明らかになった一方で、組合員からは「避難場所が分からない」といった声が聞かれ、意識や備えが足りていないことがわかりました。以上のような状況を踏まえて、生協学生委員会が中心になって「MottaCa」を作りました。

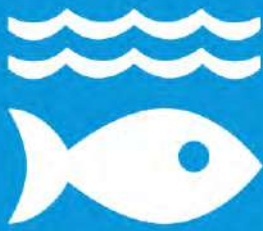
説明用紙からミシン目に沿ってすぐに切り離せるようになっているこのカードはスマホケースや財布に入れて携帯できるサイズにしました。

カードには避難所や緊急連絡先などを書き込む欄を設けています。災害が起こった後に避難経路を確認したりや何を持ち出すか考えたりする余裕はなく、連絡先や避難場所はあらかじめ確認しておく必要があります。災害に対して備える段階、避難する段階、連絡を取る段階をこのカード1枚でイメージすることができ、災害を長い視野でとらえ、危機感をもってもしものときに備えられます。

●この目標に対して私たちができること

私たちができること／自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう！

14 海の豊かさを 守ろう



Goal 14 海の豊かさを守ろう

LIFE BELOW WATER

●この目標(Goal)の解説

目標14「海の豊かさを守ろう」は目標15と並び、人間社会が依存する自然の恵みと生態系に関する目標です。海洋への悪影響をなくし、健全な状態に保全し、そして得られる自然資源を持続可能な形で利用し、利用を巡って得られる利益を公正・衡平に配分すること、そのための国際社会の仕組みを強化することがターゲットに盛り込まれています。

「海洋ごみ問題」の中でもプラスチック問題は近年注目を集め、日本でもレジ袋規制やプラスチックストローの自主停止や代替製品の使用などに取り組み始めました。しかし、海洋排出量の推計として合成繊維(35%)、自動車のタイヤ(24%)が、都市ごみ(24%)を上回っており、幅広い分野で脱プラ・資源循環の対策が求められます。

「海洋酸性化」(大気中のCO₂濃度が高まり海に吸収され、弱アルカリ性である海水が酸性化している現象)も問題となっています。温暖化対策であるCO₂削減がこの目標達成にも直結します。

漁業の面では「違法・無報告・無規制」であるものが総漁獲量の最大33%に該当するとされており、海洋資源管理の国際的な監視の強化が必要です。また、合法的な水産物が「持続可能な水産物」とも限らないため、自然資源管理の質や養殖などの漁業技術も高める必要があります。

海ごみ問題や温暖化対策等、様々なアプローチで市民や企業もこの目標達成に貢献できます。MSCやASCという持続可能な海産物を認証する仕組みもあり、消費者の選択次第で持続可能な魚市場の促進に貢献できます。



●大学生協での実践事例



新潟大学生協、新潟県立大学生協、
新潟青陵大学・短期大学生協

海はともだち

3大学のキャンパス付近の海(新潟県五十嵐浜)を約100人の学生が清掃する取り組みです。この取り組みを通して地域社会に貢献し、環境問題への意識を持つものとなっています。

当日は、自分たちが普段使っている海を掃除してきれいにし、そのきれいにした海で交流する取り組みとなっています。



九州大学生協 環境にマイクロプラスチックを 排出しにくい事業

レジ袋を有料化(2円/枚)したり、オリジナルのエコバッグを作成したり、スプーンもプラスチック製から木製に変更したりなど、なるべくプラスチックを利用せずに事業に取り組めるように工夫している取り組みです。

レジ袋有料化に際しては、その価格を理事会の場で様々な階層の理事で協議することで決定しました。プラスチック削減を促すために、レジ袋を購入しない組合員にはポイント還元を実施しました。



●この目標に対して私たちができること

👉私たちができること/自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう!

目標 15

陸の豊かさを守ろう

LIFE ON LAND



●この目標(Goal)の解説

私たち、人間社会が頼っている自然の恵みとその恵みを生み出す自然の仕組み(生態系)に関する目標で、持続可能な社会の基盤を整える目標です。具体的に、「陸地の様々な生態系・絶滅危惧種の保全」「生物の移動」などをターゲットにしています。私たちの社会の仕組みや意思決定の中で、自然の価値を正しく捉え、正しく見積もり、ふさわしい規模で自然への投資をすることを目指しています。

生態系とは、ある地域に生息するすべての生物群集と、それを取り巻く環境とを包括した全体のことです。



一見、難しそうな目標ですが、暮らしの視点からアプローチができます！
できることから少しずつ取り組んでいきましょう！

- 色々な季節に出かけ、生き物がどのような環境で生活しているかを知りましょう。
- 季節のもの・近くでとれたものを食べましょう。受粉を助ける昆虫などが絶滅するのを防ぐことができます。
- 生き物にやさしい商品を選びましょう。環境ラベルを意識して選んでみましょう。
- 保全活動グループを支援しましょう。

大学生協や様々な企業で環境保全活動が行われています。まずは知って少しずつ活動に加わっていきましょう！

●大学生協での実践事例



JUON NETWORK 森林の楽校（もりのがっこう）



大学生協では、認定NPO法人「JUON NETWORK」を設立し、体験型プログラム『森林の楽校』『田畑の楽校』の実施を通じて、持続可能な環境保全の取り組みを進めています。森林の間伐体験や果実の収穫体験などを通じて、森林を維持する重要性や自然環境を保全することによる効果などを実感できる機会を作っています。また、農山漁村と都市をつなぎ、大学生をはじめとする若者が自然に触れ、学び成長する機会を作っています。



全国大学生協連関西北陸ブロック教職員委員会 鹿害学習フィールドワークin奈良



毎年京都大学の高柳敦先生のガイドで行われている「鹿害学習フィールドワーク&ジビエ料理を楽しむ会」。2018年の開催地は奈良でした。奈良の鹿は国の天然記念物に指定されている一方で、農作物を荒らされたり国の特別天然記念物となっている春日山の原始林がシカの食害によって植生が維持できなくなっているという指摘があったりと問題点もあります。

そういったことを楽しみながら学び、交流するこの会は教職員だけでなく学生にも参加が呼びかけられています。

●この目標に対して私たちができること

👉私たちができること／自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう！

16 平和と公正を すべての人に



目標 16

平和と公正をすべての人に

PEACE, JUSTICE AND STRONG INSTITUTIONS

●この目標(Goal)の解説

この目標は、目標17と並んで、これまでの目標(目標1~15)までを達成するための横断的目標であり、この目標の達成度合いが他の目標にも影響を与えます。アイコンにも書いてある通り、大きく「平和」と「公正」に関わるターゲットで構成されています。

平和を目指すターゲットとしては、「暴力の減少」「子どもに対する虐待・暴力の減少」「組織犯罪の根絶」といったものがあります。

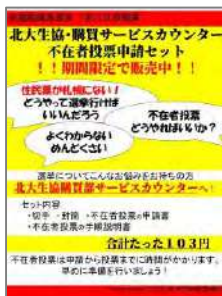
物理的な暴力のみならず、言葉などの精神面での行為も暴力と認知されつつあります。日本でも職場・大学といった日常生活でのハラスメントが問題視されるようになってきました。また、子どもに対して短期的／長期的影響を与える児童虐待も増加しており、日本の児童相談所への相談件数は、2018年度に過去最多の15万9,850件にのぼり、増加の一途をたどっています。

公正を目指すターゲットとしては、「司法への平等なアクセス」「透明性の高い公共機関の発展」「法的な身分証明の提供」といったものがあります。

市民から委託された行政をつかさどる、という位置づけである政府は、市民に対して情報を開示したり、説明責任を果たしたりする必要がありますが、多くの国では市民の情報開示を求める声が無視されています。日本でも政治家の不正や行政の意思決定プロセスが見えづらいこともあり、市民社会から行政・政府に情報開示を積極的に求めていく必要があります。そのような状況を打破し、「誰一人取り残さない」公正な社会を目指す必要があります。



●大学生協での実践事例



北海道大学生協

不在者投票セットの提供

北大生は自宅外生が多いということもあり、選挙の投票率が低い傾向にあるようです。「選挙や政治に興味を持ってもらいたい」「不在者投票の制度を活用してほしい」ことから『不在者投票セット』というものを作成・購買にて販売しました。また、院生と共に投票促進ポスターを作成しました。自分で取り寄せることに対してハードルが高い中で、購買にて手軽に買うことができていました。その結果、選挙に対するハードルが下がり、興味を示している組合員がいました。

静岡大学生協(静岡キャンパス)

Peace Now! Shizuoka



自分たちの身近なところから戦争や平和について考えようと、地域の平和資料センターと連携しつつ、2018年度より継続して実施しています。2019年度は、組合員を対象としたワークショップと、小学生を対象としたワークショップ・スタンプラリーを行いました。大学生と地域の方々が協力して、静岡が被害を受けた空襲を知り、平和について考える機会を作ることができました。

●この目標に対して私たちができること

👉私たちができること／自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう！

目標 17

パートナーシップで目標を達成しよう

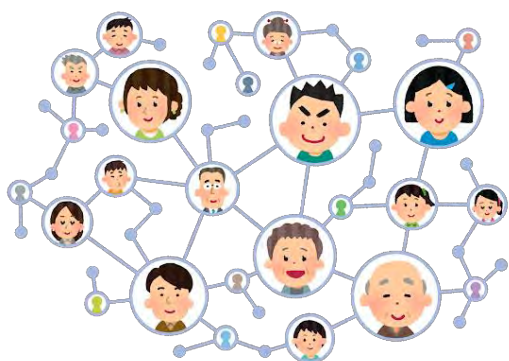
PARTNERSHIPS FOR THE 目標

17 パートナーシップで
目標を達成しよう



●この目標(Goal)の解説

目標17では、目標16と並び、SDGsの1から15までの目標を効果的、統合的に達成するには欠かせない目標です。そして、1から16の個別の課題を解決し、変革をもたらすために、グローバルなレベルで何をし、どのようにみんなで協力するかを具体的に示しています。



目標1から目標16までを達成するための「実施手段の強化」と「パートナーシップの活性化」に向けた目標が掲げられています。具体的には(1)資金、(2)技術、(3)能力構築、(4)貿易、(5)制度・政策、(6)パートナーシップ、(7)データ、モニタリング、説明責任、の7つの実施手段ごとにターゲットが分けられ、19もの項目から成り立っています。

これらのターゲットを世界で統合的に達成するためには、それぞれの国が自分の国だけを考えるのではなく、先進国は途上国を支援し、政府だけでなく、市民社会や、民間企業、大学などの教育機関などあらゆるステークホルダーが目標達成のために協力し、歩みを進めていく必要があります。

大学生協は、大学というフィールドの中で組合員が協同し自分たちの力でより良い生活を目指していく協同組合です。その中で生活する学生、教職員、生協職員などの様々な組合員が、それぞれの立場や強みを活かして大学生協の仲間みんなと協同し、持続可能な社会を目指すためのステークホルダーとして活動に取り組んでいきましょう。

●大学生協での実践事例



弘前大学生協 りんご豚丼の商品開発

弘前大学では、地域に根差した人材を育成するインターンシップ事業に取り組んでいます。その一環として、弘前大学生・地元企業・大学生協が協力した「冷凍りんご」を用いた商品開発が行われました。2019年4月から打ち合わせと準備を進め、7月には開発した新メニュー「りんご豚丼」の試食会と、3日間限定の出食を生協食堂にて実施しました。大学・地域とともに、学生の爽やかな学びを育む場を作ることができました。



東京経済大学生協 様々な団体と協力した 総代会の取り組み

東京経済大学生協は、ゼミと協力したTFTの取り組みなど、様々な団体と協力し、取り組みを実施してきました。その成果を2019年総代会では、討論の時間を活用し、教職員や学生会の方に報告の機会を設けました。「組合員のよりよい生活を！」という生協と大学の共通の目的のもと、協力関係性と生協の可能性を組合員へ周知し、更なるステークホルダーとの協力・取り組みを発展させていくきっかけを作りました。



●この目標に対して私たちができること

👉私たちができること／自分の大学・大学生協でできることを考えてみよう！

やってみよう！ レッツ！マッピング



／ 私たちがやってみました！ \

マッピングとは、ある項目に対して別の項目を位置づけたり割り当てたりするものです。今回は大学生協の取り組みにSDGsのゴールをマッピングしてみました。マッピングをすることで、自分たちの取り組みを再評価することと、SDGsを学ぶことができるので取り組みに新たな要素を足すことができます。

●マッピングのやりかた4step

1st step ～自分の取り組みを出してみよう～

自分の大学生協が行っている取り組みを出してみましよう！

実際に自分たちが行った取り組みや、職員さんが行っている取り組みも全て出してみましよう！その時に概要も書き込むと振り返りやすくなります。

例えば、食生活相談会や平和活動などの活動や、店舗や食堂の工夫なども全て出ましよう。

食生活相談会
栄養士さん呼び、組合員の食生活改善を目指している。

食堂の食口の取り組み
今年度から食口を減らすために出食数を変更した

2nd step ～SDGsのゴールを当てはめよう～

1stepで出した取り組みにSDGs17のゴールを当てはめましよう。

対面で行う際は、SDGs17のゴールのシールを貼ってみたり、オンラインで行う場合はパワーポイントなどに17のゴールのマークを貼って行きましよう。

食生活相談会
栄養士さん呼び、組合員の食生活改善を目指している。

食堂の食口の取り組み
今年度から食口を減らすために出食数を変更した



※複数のゴールが当てはまっても良い。

3rd step ～現状を知ろう～

自分の大学生協の取り組みがSDGsのゴールにどれくらい達成できているのか現状を知りましよう。多く出ているゴール、少ないゴール、まったく出していないゴール等があります。その現状を大学生協関係者みんなで確かめ合いましよう。

確かめ合うことで、自分たちの到達点を理解することができ、課題や展望を見つけることができます。



4th step ～どんな取り組みができるか考えよう～

現状を把握したら、今後どんな大学生協にしていきたいのかを考えてましよう。

その時にSDGsからヒントをもらいましよう。その時に注意すべき点は、自分の大学の組合員の生活がよりよくなるのかには必ず着目ましよう！



●実際にマッピングしてみた

関西北陸ブロック正副学生委員長とマッピングをしてみた。

関西北陸ブロックの取り組みを基にマッピングをしました。『基本解説 そうだったのか。SDGs 2020』を参考書として、17のゴールの詳細や、169のターゲットを確認しながら行いました。



加藤 庸平
(富山大学4年)



たくさんある取り組みを、どうやってマッピングしていくのか。



ワンポイント
アドバイス

様々な取り組みが意外にもSDGsに関連付いていることがわかりました！SDGsマッピングを通して取り組みの良さを再発見したり、取り組みをよりよくしたりすることが出来るかもしれません。ぜひやってみてください！



17のゴールと169のターゲットを見ながら当てはめるといいね。



芦田 早詠
(龍谷大学4年)



ワンポイント
アドバイス

やってみての感想は、思ったより簡単だったな~ってというのが率直な感想です！17のゴールだけではなく169のターゲットを見ながらマッピングしてみると、広い視野を持って考えられると思います！ぜひ、やってみてください。



マッピングしてみると、同じゴールがたくさんあるような気がするね。



石田 龍太
(関西学院大学4年)



ワンポイント
アドバイス

このSDGsマッピングは社会に目を向ける1歩目になると思います。SDGs難しそうだな~って思っている人は、ぜひやってみてほしいです！マッピングを行うことで新しい発見が出来るかもしれません！

ぜひみなさんもSDGsマッピングに挑戦してみてください。やる際には、学生委員会内、職員内だけでなく、大学生協で活動を行っている人たちが全員かかわる場で行うことを推奨します。特に理事会や総代交流会等で行うと、新たな発想を得ることが出来ると思いますので、ぜひ取り組んでみてください。

SDGsがコロナ時代を乗り越える「羅針盤」に



国連広報センター

所長 根本 かおる

今年に入ってから世界中で拡大している新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は皆さんのキャンパスライフを直撃し、日々ストレスを感じながら試行錯誤していらっしゃると思います。COVID-19危機は、保健・医療の危機から始まったのがあつという間に私たちの経済・社会全体を飲み込んでしまいました。持続可能な開発目標（SDGs）の17分野にまたがる広範な目標のうち一つでも（今回の場合、健康に関する目標3）が立ち行かなくなると、たちまち他の目標も連鎖的に打撃を受けることが浮き彫りになったとも言えます。特に、ギリギリの生活をしている人たちが一気に困窮に陥り、SDGsの「誰一人取り残さない」という大原則がいかに重要かを痛感しています。COVID-19以前にSDGsでもっと前進があったならば、ここまで深刻にはならなかったのではないか、とされています。

今年で、SDGsの実施が始まって5年目、達成期限の2030年まで10年となり、SDGs達成のための「行動の10年」が1月から始動しました。COVID-19が拡大する以前から深刻な貧困・格差、気候危機の急激な悪化、根強く残るジェンダーの不平等、大幅な資金不足など多くの課題を抱え、SDGs達成の目途が立っていなかった訳ですが、この5年間の前進もCOVID-19パンデミックで多くが押し戻されてしまっています。例えば、一人当たりの所得の減少率は1870年以来の下落幅で、今年第2四半期で4億人のフルタイム雇用に対応する労働時間が失われました。深刻な栄養不良にある人口は年末までに、昨年倍の2億6500万人に達すると見込まれています。女性は医療・福祉従事者の7割を占め、感染拡大を抑え込む最前線にいますが、同時に保障の乏しいインフォーマルセクターやより大きな打撃を受けている観光・外食・小売・卸売業界などに多く、COVID-19の影響がより深刻です。

このようにCOVID-19が私たちをSDGs達成からさらに遠ざけようとする中、アントニオ・グテーレス国連事務総長をはじめ世界のリーダーたちが口々に訴えているのは、世界がいわゆる以前の「常態」に戻ることはあり得ないということです。グテーレス事務総長は「以前のやり方に戻り、今回の危機を悪化させてきたシステムを単純に再現することはもうできない。私たちは、さらに持続可能で包摂的、かつジェンダー平等型の社会と経済へと、より良い復興を遂げる必要がある」と強調しています。COVID-19という人類の悲劇を、SDGsを羅針盤にして、より包摂的、平等、グリーンでより持続可能な世界をつくり上げる機会としてとらえ、ピンチをチャンスにして大胆に社会を変革することが必要です。

ぜひ皆さんにも自分にできるSDGsの取り組みを実践し、拡大し、仲間を増やし、皆さんの未来がより良いものになるようアクターとして取り組んでいただきたいと思います。勉強や買い物、暮らしの中でできるSDGsアクションや工夫がたくさんあります。力を合わせて、一緒にこの難局を乗り越え、より持続可能な社会をともに築いていきましょう。皆さんの力に期待しています。

(2020年8月)



根本かおる / 国連広報センター所長

東京大学法学部卒。テレビ朝日を経て、米国コロンビア大学大学院より国際関係論修士号を取得。1996年から2011年末まで国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）にて、アジア、アフリカなどで難民支援活動に従事。ジュネーブ本部では政策立案、民間部門からの活動資金調達のコーディネートを担当。WFP国連世界食糧計画広報官、国連UNHCR協会事務局長も歴任。フリー・ジャーナリストを経て2013年8月より現職。2016年より日本政府が開催する「持続可能な開発目標（SDGs）推進円卓会議」の委員を務める。著書に『難民鎖国ニッポンのゆくえ - 日本で生きる難民と支える人々の姿を追って』（ポプラ新書）他。

全国大学生協連 SDGsハンドブック

発行日 2020年10月1日(初版)
発行者 毎田 伸一 (全国大学生協同組合連合会 専務理事)
発行 全国大学生協同組合連合会
〒166-8532 東京都杉並区和田3-30-22
電話 03-5307-1124
FAX 03-5307-1180
メール nfuca-gakusei@univ.coop
URL http://www.univcoop.or.jp/
編集 学生委員会/社会的課題委員会

構成
編集委員 矢間 裕大 (全国学生委員長/大阪大学)
田島 慶大 (全国副学生委員長/東京農業大学)
田中 蒼大 (全国副学生委員長/富山大学)
井上 弥咲 (全国学生委員/高知工科大学)
菅野 瑞貴 (全国学生委員/小樽商科大学)
鈴木 郁 (全国学生委員/東北学院大学)
皆川 淳哉 (全国学生委員/長野大学)
安井 大幸 (全国学生委員/琉球大学)
吉村 暢基 (全国学生委員/立命館大学)
中井 智仁 (全国学生委員/酪農学園大学)
清藤 大河 (全国学生委員/山形大学)
古川 皓介 (全国学生委員/横浜国立大学)
原田 将弥 (全国学生委員/白梅学園大学)
山本 慧樹 (全国学生委員/日本獣医生命科学大学)
加藤 奈那子 (全国学生委員/岐阜大学)
加藤 庸平 (全国学生委員/富山大学)
芦田 早詠 (全国学生委員/龍谷大学)
石田 龍太 (全国学生委員/関西学院大学)
藤井 祥子 (全国学生委員/岡山大学)
木原 悠駿 (全国学生委員/九州大学)
國見 伸行 (社会的課題委員長/京都大学生協専務理事)
花山 嶺 (社会的課題委員/北海道教育大学)
千葉 樹 (社会的課題委員/宮城大学)
吉田 夢 (社会的課題委員/岩手大学)
水田 裕大 (社会的課題委員/東京農業大学)
猪又 みなみ (社会的課題委員/日本女子大学)
齋藤 啓太 (社会的課題委員/工学院大学)
角田 咲桜 (社会的課題委員/茨城大学)
鈴木 友陽 (社会的課題委員/名城大学)
野中 亮佑 (社会的課題委員/静岡大学)
乾 遥可 (社会的課題委員/大阪樟蔭女子大学)
児島 佳幸 (社会的課題委員/同志社大学)
谷村 優貴乃 (社会的課題委員/立命館大学)
星野 来季 (社会的課題委員/富山大学)
松尾 洸大 (社会的課題委員/京都工芸繊維大学)
林 優樹 (社会的課題委員/福山市立大学)
長尾 香奈 (社会的課題委員/愛媛大学)
嶋本 紗弓 (社会的課題委員/九州工業大学)
鳥越 有彩 (社会的課題委員/西南学院大学)
校正 四方 遼祐 (全国学生委員/奈良県立大学)

協力 北海道大学生協同組合、同志社生活協同組合、水産大学校生活協同組合
大阪いずみ市民生活協同組合、いばらきコープ生活協同組合

参考資料 『1時間でよくわかる SDGsと協同組合』一般社団法人 日本協同組合連携機構/一般財団法人 家の光協会
『基本解説 そうだったのか。SDGs 2020』一般社団法人 SDGs市民社会ネットワーク
『持続可能な開発目標・SDGsとは? 17の国際目標やターゲットなどを解説』gooddoマガジン
https://gooddo.jp/magazine/sdgs_2030/ (最終閲覧日: 2020年8月23日)
『SDGs教育』子どものみらいを切りひらくメディア
<https://mirai.jp/archives/category/leader/sdgs> (最終閲覧日: 2020年8月23日)

大学生協連SDGs特設サイト公開中！

<https://www.univcoop.or.jp/sdgs/index.html>

特設サイトでは、国連関係者からのメッセージや大学生の座談会、全国の大学生協の取り組みなどを掲載中です。本冊子に掲載されている座談会のフルバージョンも掲載しておりますので是非チェックしてみてください！



 **DECADE OF >>> ACTION**

つながる元気、ときめきキャンパス。



全国大学生生活協同組合連合会

〒166-8532 東京都杉並区和田3-30-22

<http://www.univcoop.or.jp>